Architecture Watching.2 盈進学園東野高等学校

●目次

山崎泰孝●結節点建築は濃度ある空間たりうるか———1

From Architect

C.アレグザンダー———2

H.ナイス———4

Interaction

フィーリングプラン———12

From Watcher

小林浩志●写真による解読———18

坂本 勉●写真による解読———22

梶 洋哉●写真による解読———26

市川 浩●建築ではなく…———30

森 毅●東野高校における時間の匂い———32

庄野泰子●C.アレグザンダーを聴く———34

宇佐美圭司●「何に似ているか、」というアレグザンダーの嫌いな問いかけ———36

小林洋子●思いっきり遊んじゃえ!———38

長谷川逸子●自然と人工、建築と理論———40

富田玲子●長い旅路の果てに———42

野田俊太郎●DIRE STRAGHTS を聴きながら…———44

井上章一●しろうととしろうとの出会い———46

盈進学園東野高校生徒雑談会●僕らの学校変格活用———48

At the End.

多木浩二・難波和彦●問題群としてのアレグザンダー———51



結節点建築は濃度ある空間たりうるか

山崎泰孝

さて、盈進学園である。昨年の「Architecture Watching 1. 藤沢市秋葉台文化体育館」に続いての特集である。編集者としては感想を控えるべきかもしれないが、正直なところ私はこの建物に馴じめなかったと言わざるをえない。どこか別の風景が、輪郭のはっきりした幻として今あるべき建築風景の表層に張り付いているように見えたのだ—書割のように。

私は建築を含めた空間を創るにあたって、また見るにあたって、「風景」を常に考えてきた。それは、物理的な風景であり、かつまた心象風景であり、ありえない風景でさえあった。そこには多様であるように見えながらも、いつも何らかの統一性のある風景が見いだされてきたのだ。だが、ここでは2つのあるいはそれ以上の複数の風景が、建築的な矛盾をいくつもはらみつつ、そして抽象化された姿で、併存している様が見えたのである。それでいながら、そこは強力な意志の存在に満ち満ちている。すなわち意志においては統一性がありながら、建築的風景としては矛盾しているのである—その統一性を原(メタ)風景とでも言うべきか。あたかも交差点での出会いのように統御された偶然性を直覚するのだ。そこで体得されるのは、ものではなく、ことである。多くの人が出会い、ものが出会い、思想が、風景が出会う、ことなのだ。そして、人はそこである驚きを感じるのだ—異化といってもよい。それは、結節点建築とでも呼ばれるべきか。

そこでは、どのような出会いがあったのか。順不同で列挙してみよう。建築家とそこで生きる者が、日本と外国が、プロフェッショナルとアマチュアが、過去と未来が、理論と現実が、完成と未完成が、先生と生徒が、立体と平面が、風土と建築が、建築と非建築が、そして設計者と観察者が。繰り返そう。そこにあるのは、ことである、点である。実体として摑もうとしても、常にすり抜けていくのだ。そこには、言いようのない驚き—あるいは実体または建築の不在への失念—の響きが残っているのみである。そこでは濃密な空間の存在を感じるというより、濃縮された、それゆえに殆ど存在を喪失した事件の痕跡が感じられるのかもしれない。勿論、こうした感想は私だけの由無し言であるようにも思える—幻想の舞台装置の上で演じられた夢の如く。

こうして、私は希うのである。新たなる出会い———この本、そして設計者と観察者、盈進学園東野高等学校と読者とのそれを。



From Architect

建築をつくるということ

次なる文章は私の仲間と執筆した本の序文に書かれたものである。

「この本は建築と計画に対する全く新しい取り組み方を述べるシリーズのうちの一冊である。このシリーズは、建築、建設、計画についての今日の考え方とは別の、ある実際的な代案を示すことを意図している——しかもそれが、今日の理論や実践にしだいにとって代ることを、私達は願っている。」

この盈進学園のプロジェクトは我々がこの新たな方法をかなり大きなスケールで実践できた初めてのものであった。

ここ数年の間に我々は色々な小規模プロジェクトを実践し始めた——リンツ・カフェ(「THE LINZ CAFE」として出版)、メキシコにおける新しい住宅計画(「THE PRODUCTION OF HOUSES」として出版)、また建築雑誌に近日中に掲載される予定のバークレーの2つの住宅やその他諸々の建設プロジェクト等である。これら全てのプロジェクトは全く新しい世界観に基づいて進められた。それは建築を創り出すということは芸術や工芸の作業であり、建築は精神性を持ったものとして見ることができると教えてくれる。又面白いことにそういう建物は同時に古い意味でも優しくすなおに包んでくれる様な建物でもある。

我々はこれまで大きなスケールでこの考えを実践することができなかった。というのも建設の方法、システム、プロセスに必要とされる改革がたいへんだったのに加え、良い機会もそう安々と見つからなかったからである。

そんな時、盈進学園常務理事の細井久栄氏という現代日本にあって最も先見の明を持つ人物との協力によりこのプロセスを東京郊外のかなり大きなプロジェクトに実践することができたのである。

この種の事が20世紀において実現できるという事実はもはや疑いのないこととなった。

約1000万ドル(24.5億円)の工事、建物にして30棟以上のこの大プロジェクトを当初たてたかなり厳しい予算の中で、超過することなしに、そして工程の遅延もなく建設することができたのである。1000万ドルの建築群全てが9ヶ月間で遅れもせず建てられたのである。従ってこの考え方が20世紀の普通の生産方法に全く首尾よく統合することのできる可能性が明らかになったのである。

もちろん成功するために我々は幾つかささやかな妥協をしたのであるが、その妥協さえ我々が達成できた事の重大性に比して極めて些細な事だった。



盈進キャンパス

建築　環境構造センター／クリストファー・アレグザンダー、ハンスヨアヒム・ナイス、イングリッド・キング、ゲーリー・ブラック＋日本環境構造センター

この計画のために我々は構造や施工に前例の無い一連の革新的アイデアを用いる必要があった。全ての建物は我々自身の事務所で構造設計された。我々は建物のデザインと構造設計を分けない、それ故に我々は建築家であり構造技術者である。ここに建つ多くの建物はまた全く新しい施工方法も含んでいる。それは他のプロジェクトを通じて開発されたものであり、又今回のプロジェクトに特別開発されたものもある。新しい施工法や構造の開発は建物の創造の一部分として必要である——絶対に基本であると云っても良いかも知れない——特に、建物の伝統が現在の様に貧しい時には。

建物のもつ精神的本質は建物が作られる方法から分けてしまうことはできない。建物は作り出される物であって机上のみで設計される物ではないのである。

そして必要な開発の類は我々のカリフォルニアのワークショップにて行われる。そこで我々は正規の施工業者として実際に建物が造られる条件に則した施工法、新しい人間的プロセスで常に実験を行っている。それ故に作る側の人間——施工者——も非人間的なプロセスの中のロボットとしてでなく人間として参加できる様になるのである。

とりわけそして最良の事はこれらの建物の内に何か精神的本質を達成することができたことである。或る人はこれらの内に何か「本質」があることを感じる。建物の内に人間の精神が含まれていることはセンセーションである。建物が我々自身のどこかを揺さぶり我々の心に触れてくるのである。過去60年に及ぶ建築の主流の中で建物が人の心に触れるという事ができなかったのは単にそうしようとしなかったからなのである。

我々はそうしようとしている。充分に努力し続けるならば、確実に新しい建築は生まれ出ようとしている。先行するイメージに支配された近代のエゴや全くおぞましい程イメージに徹したポストモダン主義は全て過去のものとしてほうむられるであろう。

我々がここで手を染めた実験は創造された建物もその一部も全てがその〝魂〟から生み出されたという全く新しいタイプの建築のことなのである。複雑である必要はない。小手先にこだわる必要もない。イメージを扱うのではなくリアリティーを扱うのである。率直であろうとすることだ。つまり我々の世代を超えてずっと存在し続けた昔からの方法に人間的な感情を開放してやることを求めているのに過ぎないのである。

クリストファー・アレグザンダー（訳．塩原民雄）



盈進キャンパス・構造とその全体性

キャンパス内の多層的構造

全体性 Wholeness

「全体性」とは環境のある部分の特定な質として理解され得るものである。それはまず感情（フィーリング）として認知される。どこか古い美しい寺とかすばらしい町を訪れた時、この「全体性」を感じとることがある。この「全体性」の印象というのは漠然としたものでなく現実的に、確かに認知できる特別な構造のもつ感情（フィーリング）であり、こういった場所に見出すことのできるものである。そしてこの「全体性」の構造を創り出す原理、規則、手順は明らかにできるし、今日の建物や場所に用いることのできるものでもある。これらの原理などの中の幾つかは、既に多くの出版物に述べられてきている。そこでここでは盈進キャンパスの構造の中にある「全体性」、その「全体性」の構造を作るプロセスの結果を強調して述べたい。そのためにあらゆる構造に「全体性」を生み出す「表現方式」とその「構造の段階」を明らかにしなくてはならない。

構造の表現方式とその段階 Modes Levels

盈進キャンパスは多くの異なる表現方式と段階の構造から成り立っている。そして（もちろん）キャンパス構造もその「全体性」を作りだす原理、規則や手順を用いて作られた訳である。「全体性」のコンセプトはあらゆる表現方式や段階に適用される。また、それらも各々「全体性」を形成するものでなくてはならない。そこでまずこのキャンパスの「全体性」にとって重要な構造の幾つかの表現方式について考えてみたい。

〈パタン〉Pattern

「パタン」は環境の生活の機能的要素である故にたいへん重要な表現方式のひとつである。この「パタン」はユーザーの参加を通じてキャンパスの生活にリアリティを与えるために産み出される。「パタン」はあらゆるスケールの段階に現れる。同時に「パタン」は「全体性」をつくりださねばならない。

〈ポジティブ・スペース〉Positive Space

「ポジティブ・スペース」と呼ばれる表現方式は美しい内部空間を作ると同様にポジティブであるべき外部空間を作る上で特別重要なものである。又、これは今日では全く忘れ去られてしまっている故に尚更重要である。

〈中心と中心領域〉Centers Fields of Centers

もう一つの重要な表現方式のひとつは構造の中に現れる「中心と中心領域」である。これらは「センタリング・プロセス」Centering Process の適用から生み出される。「センタリング・プロセス」とは現場で直接配置計画を行い施工期間を通じて修正・調整し続けるというプロセスにおいて、それまで創出されてきた構造を保ちながら設計そして施工におけるひとつひとつの作るという行為を通じてその構造を強めていく一連の作業である。

〈人間的かたち〉Human Geometry

このキャンパスの構造の中に現れている特殊なかたちもまた一つの構造の表現方式である。これは「中心や中心領域」、「全体性」を生み出すのに役立つ。

〈ふさわしい施工〉Good Construction

全体の構造に適合し、かつ、より強めてくれる様な施工を峻別したり開発したりすること——ふさわしい施工を検討すること——も構造を守りながら改良を加えていくというプロセスの別の表現方式と考えてよい。

〈コストと全体性〉

コストの正しい配分も構造の部分として現れる表現方式の一つである。適切な所に適切な施工をすることはコストのふさわしい配分を表現していると云ってよい。

〈色と材料〉

さらにもう一つ構造の表現方式には色と材料がある。光明をもたらす様な色の配分を求めていくといった色の選択も重要な表現方式のひとつである。

これら構造の異なる段階に現れる表現方式全てが助け合って「全体性」を生み出そうとする。そこで、このキャンパスのそれぞれのスケールに現われる構造の段階を検討してみたい。



〈全体としてのキャンパス〉

最も大きい構造の段階においては全体としてのキャンパスを考えなくてはならない。これはとにかく全組織構造と全体の見え方さらに、全体にわたる感情（フィーリング）とその安定性を云う。

〈主要な部分又は大きめの構造〉

The Main Parts or Larger Structure

構造の第2の段階としてこのキャンパスの主要な「大きめの構造」を見ていく必要がある。この「大きめの構造」もまた共に助け合って「全体」を構成し、かつ、それ自身としても「全体」である得る。これら「大きめの構造」とは、例えば玄関道、中央広場やホームルーム通り等である。

〈建物〉

第3の構造の段階は個々の建物である。建物は幾つか集合してより上の段階の「全体」や構造を構成し同時に、やはりそれ自身で一個の「全体」でなくてはならない。

〈建物の内部〉

第4の構造の段階として、建物の内部空間を考える必要がある。それもまた建物を「全体」へと作りあげていく部分であり、それ自身において「全体」でなくてはならない。

〈ディテール〉

第5の構造の段階では内・外部のあらゆる細かなディテールまで問題にされる。これまでのレベルと同様にそれ自身で「全体」であるとともに、より上の段階の全体を構成していくべきものである。

「構造の表現方式」は「構造の段階」とともに助け合って全体の構造を作りあげる。「構造の表現方式」はパタンと参加、コストと施工、色と幾何学、設計や施工に取り入れる感情、さらに又、構造そのものをもその一部として使用することもある。

ここではたとえ表現方式と段階は未完成な形であっても両者合わさり「全体性」を構成することを考え、関連のある「構造の表現方式」を含みながらこのキャンパスを3つの異なる「構造の段階」で述べてみたい。

「全体」としてのキャンパス

全般的特徴

このキャンパスの「全体」としての理解とは全般的な特徴そして主要なかたちを把えることである。それはま

た初めてキャンパスを見た時、瞬間的に気がつくものは何かという様に考えてもよい。そうして把えられる「全体」としてのキャンパスの特徴は以下の通りであろう。

1．建物と敷地は黒っぽい瓦、そして幾つかの赤い鉄板葺きの傾斜屋根により特徴づけられる。各々の建物の壁は大きさも仕上も異なっている。伝統的な白や黒しっくいもあれば、普通の塗装面や木の壁、一種のなまこ壁の様なもの、さらに木やコンクリート製の列柱もある。足元廻りは全てコンクリートの灰色。地面には大谷石敷き、砂利敷き、芝生が見られる。

2．キャンパス全体が木塀によって囲まれていることも直ぐ目にとまるであろう。これが敷地の外縁で、内部にひとつの世界を形成している。

3．またほとんどの建物が何となく敷地の真中あたりに集まっていて、それ自体でひとまとまりの世界を作っていることに気づくだろう。これは内境内と呼ばれ、敷地面積の約1／5にあたる。

4．建物、塀に囲まれた内境内と敷地境界の間には運動場や庭そして少数の小さな建物があることに気づくだろう。ここは外境内と呼ばれるところで内境内を取りまいて、その4倍の面積を有する。休憩したり屋外活動やスポーツのための場所である。

5．そして最後に中央に向かってくぼんだこの敷地の、一番低いところに広がる池もすぐ目に付くだろう。この池は内境内と外境内、建物の建つ高密な部分と広い緑地や運動場を結びつけている。同時に敷地の中心であり、この廻りは散歩したり休息に適している。

これが一見して認識できる全体、ヴィジョン、特徴そしてリアリティとしてのキャンパスである。全ての要素が集まって「全体」を作っている。

キャンパスの主要部分

大きめの構造、ポジティブスペースそして全体性

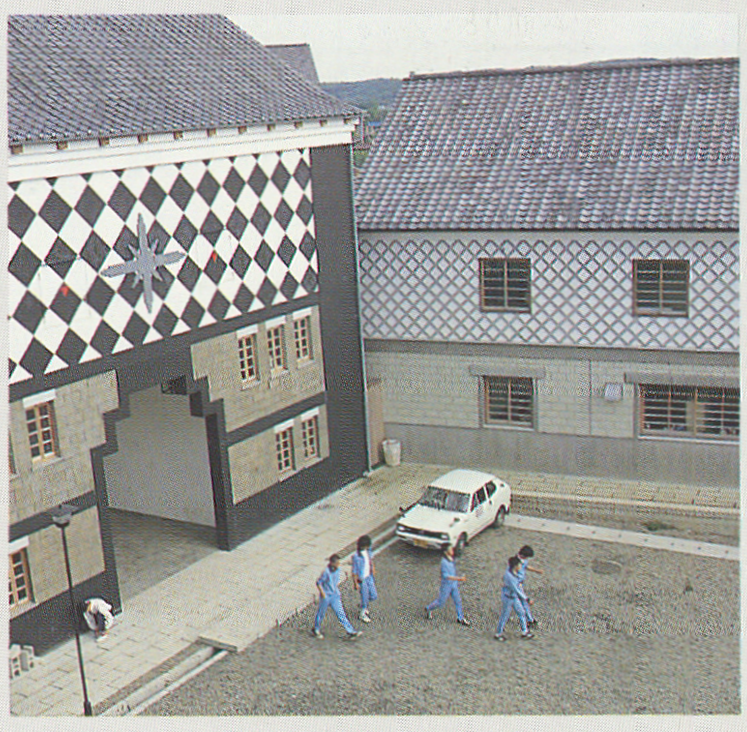
こうして最初に「全体」としてのキャンパスを理解したならば次の「構造の段階」に理解が進む。より詳細な、しかし比較的大きなエレメントである。そして最初の「構造の段階」のもつ「全体」を反映しながら、又共により大きな「全体」を作っている。これらの大きなエレメントを「大きめの構造」と呼ぶことができる。この構造もそれ自身が「全体」であり、かつそれが幾つか集まってまたより大きな「全体」を作るものである。この「全体性」の重要な特徴は順々に連続するものとして「大きめの構造」は理解できるということである。歩き廻ってみると「大きめの構造」が集合して作る「全体性」は容易に見つかる。加えて「大きめの構造」の主要な基準のひとつは「ポジティブ・スペース」の存在であり、その存在は優れた「大きめの構造」や「より大きな全体」にとって不可欠である。

それでは「ポジティブ・スペース」、建物の用途、そして建物相互の関係や「全体性」を考えながらこれら「大きめの構造」をみていこう。

玄関道

敷地外縁の連なる塀の一画より玄関道が始まる。まず門がある、これが「第一の門」である。この門より内境内の領域まで玄関道が伸びている。玄関道に沿って塀や樹木、又塀の一部としての建物が連なり、形成している。たいへん静寂な場所である。玄関道が内境内と出会う所に、次の大きな門、正門がある。この道は少なくとも1日に2度は往き来するところである。朝この玄関道を通ることは、これから始まる授業に向けて心の準備を促すという最も重要な働きをもつ。





中央広場

玄関道と正門を抜けると中央広場に出る。ここは落ちついた厳粛な雰囲気をもちしかも主要な軸線を有する場所である。中央広場は正門、管理棟、教室棟、そしてもう一方の側の大講堂に囲まれている。大講堂に繋がった音楽堂もこの広場の一端を形作っている。そして最も重要なことは、正門の反対側には池があり、中央広場はこの一方のみに開けて、より大きな構造を作り出している。池の向うには芝生が広がりさらにその後に建つ食堂で閉じられている。こうして中央広場はそれ自身の持つ構造よりさらに大きな構造に広げられ囲われている。ひとつの囲われた「大きめの構造」がさらに池や芝生・食堂と共にもうひとつさらに「大きめの構造」を作っているというユニークな構造をしている。この構造の重層性は「全体性」のフィーリングにとって特に重要である。つまりそれはひとつのスケールの構造の段階のみでなく幾つものスケールの構造の段階が重なり合い結び付き合う構造から「全体性」ができあがると云えるからである。

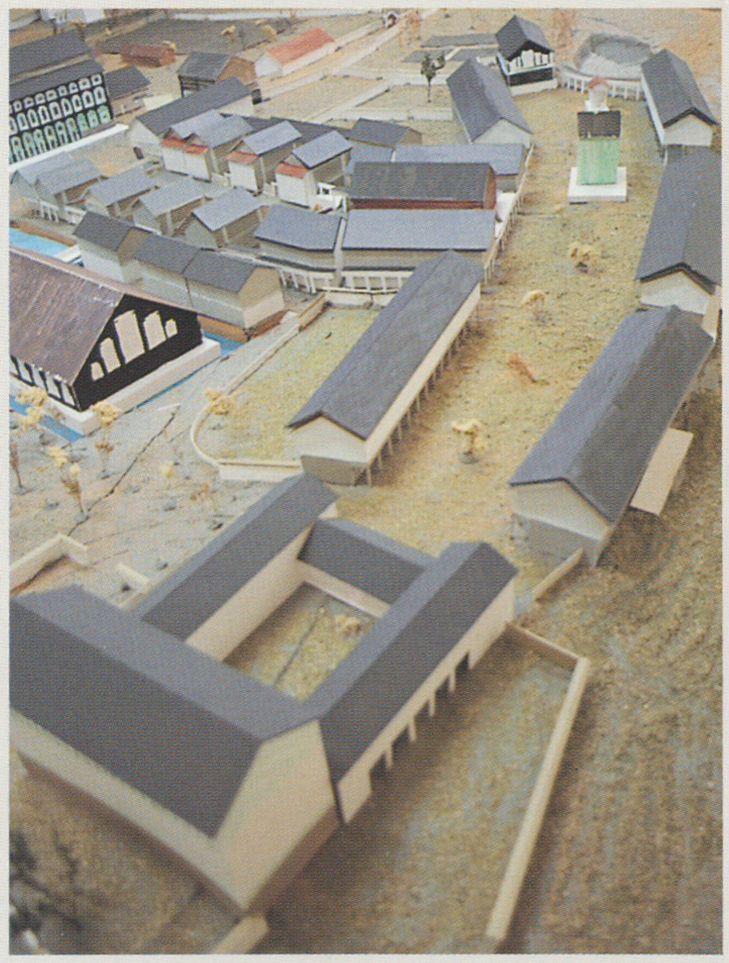


ホームルーム通りと2本の小道 Small Lanes

玄関道、中央広場と進んで来るともう一つの「大きめの構造」にぶつかる。左手に高校生の領域であるホームルーム通りが伸びている。しかし中央広場から直角に始まるために最初はその進行方向からは見えない様になっているのである。中央広場から小さな木の門をくぐるとそこがホームルーム通りである。ここは広く、生き生きとして陽光の満ちた通りである。ホームルーム通りを形作る建物はひとつひとつ独立した教室棟で、通りは少しづつ登りながら低い擁壁に区切られて4つの異なるテラスを有している。教室棟の間にはよりプライベートな小さな庭がある。この庭と通りとは白しっくいの塀で区切られ、通りとは小さな木戸口で繋っている。つまりこのホームルーム通りも様々な構造の段階で構成されていると云える。まずポジティブな雰囲気を持った通り部分全体、次に通りの4つに分けられたテラス、第3にもっと小さなスケールで建物の間の小さな庭、そして全てが集まってひとつのより大きな「全体」を作っている。ホームルーム通りの主な中心は通りの終端に位置する多目的ホールである。ここまで歩いて来て振り返るともうひとつの特徴に気がつく。見かけ上、通りが巨大な壁である大講堂まで広がっているのである。ここでまたホームルーム通りと中央広場の2つの異なる「大きめの構造」が重り合った、もう1段上の段階の構造を見ることができる。もっとここをよく見ると通りの外側に平行に2本の小道(アーケードとその横の細い道)が中央広場から将来の大学領域まで繋っているのがわかる。







将来の大学領域

田の字センターと呼ばれる将来の大学領域はまだ建設されていないがその意図するところを簡単に述べておきたい。ホームルーム通りを越えると学園と大学の本質的な中心がある。これまでに述べた幾層もの末に到達するこの中心はまたその中に幾つかの層と静寂のレベルを有する。この中心は大学の大部分と高校の一部を含んでいる。

大学回廊

この中心の一端にやや高まったそして最も落ち着いた大学回廊と呼ばれる所がある。大学の内なる聖域である。中央にたいへん静かな中庭があり、研究室や図書館がとり囲んでいる。

さて最後の2つはまだ建設されていないので概念上のみであったが、キャンパスの5つの大きめの構造を歩き終わった。ここで気がついたことはひとつの「大きめの構造」から別のそれという或る種の進行過程、最後の内なる聖所にたどりつくまでの「大きめの構造」の連続である。しかしまた中央広場の様に他の3つの「大きめの構造」と結び付き合い、そして他の2つのそれらと重なり合って強められた構造についても認識できた。つまり建物によって特徴づけられそれ自体幾つも集まってより大きな「全体」をつくる「大きめの構造」のこの配置は一つの主要な焦点を有しながらも、それらが連なっていく構成となっているのである。さらに加

えて、ひとつの「大きめの構造」が次のそれへと移行してゆくそのどの場所にも何らかの特別なものが用意されている。例えば「玄関道」から「中央広場」へ入る時には門をくぐるし、「中央広場」から「ホームルーム通り」へは小さな木の門、手前の「小道」Laneへは管理棟の通路を抜けて入る。そしてホームルーム通りから「大学領域」へは多目的ホールを越える。これらの特別な結節点は構造を結びつける重要な性質をもつ。

「大きめの構造」としてもう2つ、池と外境内について簡単に触れておきたい。

池

池は敷地の最も低い部分に位置し内境内と外境内を結び付けたり、分けたりする役目を持っている。池の教室棟に近い側には島の様に体育館が建ち、もう一端の方に大講堂がある。そして中央広場から対岸へは外境内さらに食堂へ向かう太鼓橋がかかっている。今、池にはアヒルとボートが浮かんでいる。

外境内

外境内には運動場と庭そして幾つかの建物が交互に配置されている。いろんな種類のそれほど大きくないコートやグランドが点在する。芝生の広場を前にした食堂は最も生き生きした場所である。そして北側には雑木林が広がり、将来うっそうとした森になるであろう。

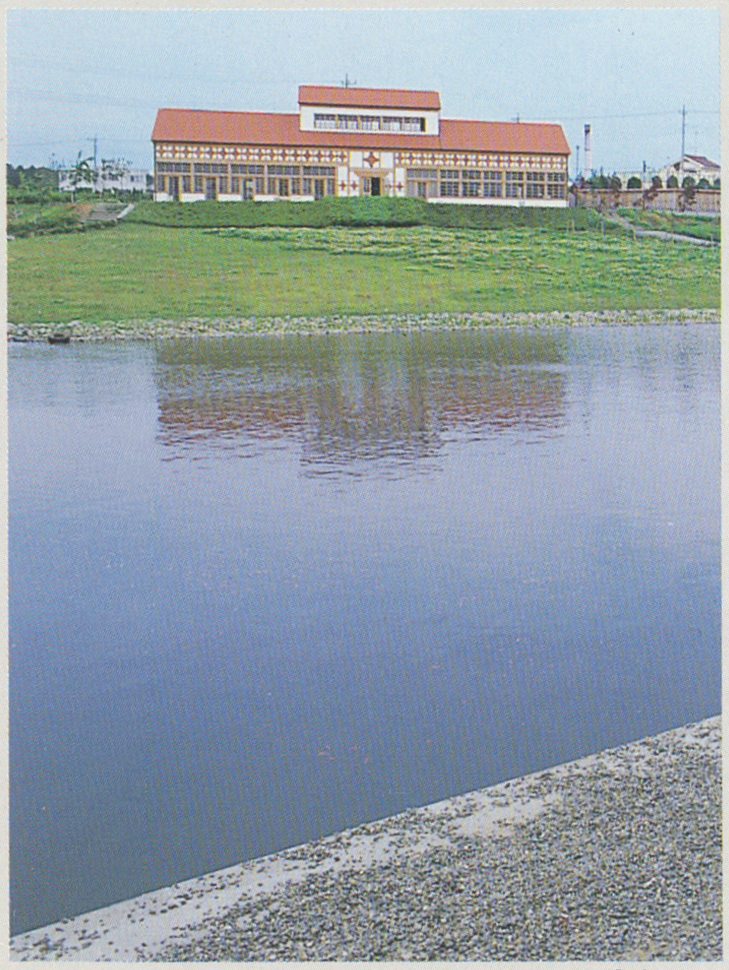


Photo by Tsutomu Sakamoto

建物—内部空間

中心、人間的かたち、色、パタン、施工

建物は「大きめの構造」(玄関道やその構造、そして他のものとの係わり合いでできる構造)と助け合って内部空間にも、その施工や詳細において、その「全体性」を形作る様になっている。我々の基準からすると建物はまたそれ自身が「全体」でなくてはならない。外側からみると、そのボリュームや壁面、その隣にくる空間がひとつの「全体」になっていなければならないし、又、内側からみるとその内部空間、組織そしてその特徴自体も又「全体」を作らなくてはならない。ここではそれ故、パタン・人間的かたち・中心・色そしてふさわしい施工によりどの様に「全体」の形成が試みられ、部分的であってもどの様に達成されているか示してみたい。



第一の門の素朴さ

第一の門の「全体性」はその素朴さにあり、それは「主要な入口」と呼ばれるパタンから来ている。又、「玄関での場面転換」と呼ばれるパタンにも関係している。かたちに関してはここのアーチについて注目したい。それは「良い形」と呼ばれるものである。「全体」としてキャンパスに決定的な影響をもつ主要な入口は第一の門によって作られる。この建物の特徴は誰でもが入りたくなる様なアーチのある形の良い門で、とても親しみ安く素朴なことである。そして中に入ると通路には形の良い段々のついたコンクリート製の持送りの上に木の梁と天井が載っているといった構成となっている。

ポジティブ・スペースとしての塀の重要性

ここではどうして塀の様に単純な要素が「全体性」の一部分として「ポジティブ・スペース」を生み出すのに極めて重要なのか理解できるだろう。

第一の門を抜けて路の中央に敷かれた大谷石舗装の上に立つと両側に正門まで約70mの高い塀が続いていることに気づく。この塀が「ポジティブ・スペース」の生成に極めて重要なのである。これが無かったらいかなる「ポジティブ・スペース」も、玄関道すらも有り得ない。又、塀の一部として建つ大工工作棟は在来工法で造られた木造建築である。メンテナンス・センターとしてまた実際に工作のできる教室として学校の機能そして性格上からも大変重要なものである。又、小さな展示スペースも設けられている。



正門の特徴とかたち

正門では「パタン・ランゲージ」から導き出された特徴がそのかたちに、外観に、内部の空間の組織にどの様に具体化されたかという好例が見られる。

玄関道の一端に正門は建っている。重々しい高さ、ボリュームを持つこの建物は、やや暗くて力強い一種日本の伝統的な精神性を表わしている。従ってここを通り抜ける時には粛然とさせられるのである。建物の外観は、上部に大きな黒白の市松模様が占めており、隅に黒く太い柱型、そして幾分暗い褐色の石肌と全体にかなり暗い表情をもつ。通路に面して両側に1ヶ所づつ小さな入口があり、狭い階段を登って暗い感じのする内部へ導かれる。事実この正門は少し神秘的であり、入るのを少しためらってしまう風でもある。狭い階段や部屋を過ぎると3階には予想外の大きな窓のある広い2つの部屋が現れ驚かされるだろう。これは書道と生花のための教室だが、外部の人にはちょっとわかりにくい。内部の人のための場所である。

管理棟とその施工

管理棟では「ふさわしい構造」の意味するところ、つまり周囲の日本建築の伝統との関連も考え特定の状況には特定の施工が適用されなければならないという事が示されている。

正門を抜けて、一息つくと、大講堂と管理棟に囲まれた中央広場に踏み入っている。この建物の最も目立った特徴はコンクリートブロックと木造の混構造という施工にある。1階は厚いブロックの壁と巾の広い臥梁のある重々しい感じで来訪者をむかえる。さらに部屋の中には木の柱が立ち、この軟い材料がまた力強い感じと対比をなし1階の空間を特徴づけている。この木の柱とブロックの壁の上に2階の木造床が支えられ、組積造と木造のユニークな組み合わせを形成している。2階はそのまま木造として立ち上がっており、たいへん軽快で心地良い理事室として作られている。ここからは中央広場や池、庭等がよく見渡せる。

この施工の特徴は「なまこ壁」に似た外壁の構造にある。しかし実際は構造的な理由を持っていた点で大きく異なる。というのは屋根の吹き上げられるのをなまこ状のリブの中に鉄線を通して臥梁に繋ぎとめておくためのものであった。



より大きなセンターとしての大講堂と色

大講堂は幾つかある「中心」のさらに上の段階の「中心」である。ここでは他の全てのものがここに関係するという「より大きなセンター」の理論を知ることができる。内部においては特別な色彩計画理論が適用され「色の装飾性」Ornamentとして内部空間の中心性がより強調されていることもわかる。

大講堂はキャンパス全体のコミュニティを象徴している。最も公共性の高い建物で、存在感をより高めるためにキャンパスの真中に最も高く、他から孤立して建っている。

堅固な基壇の上に、高さ23mと他のいかなる建物よりずっと高くしかもどっしりと建つこの建物はかなり重々しく威圧的でさえある。中央広場側に面した14本の黒く太い柱とその上の大きな柱頭は堅牢な雰囲気、しかもキャンパス全体に統一感を与えている。この特徴は大きめの瓦で葺かれた勾配の違う2段の屋根で強められている。

基壇に上り、大きな重い木製のドアを開けると、小さなシャンデリアだけに照らされた暗い玄関に入る。しかし次の木製ドアを開けて集会ホールに入ると色に魅了されてしまうのである。柱と柱頭は黒しっくいの磨き仕上で覆われ、その中に暗赤色の山形の模様が入っている。天井の梁は暗いが強い薄紫色で覆われている。観客席の天井は薄緑色をしている。またホールを取りまいて装飾梁がステージに達しており、ステージの垂れ壁は白地に桃色の菱形が配列されている。さらに集会ホールに吊られた3つのシャンデリアの光がここに儀式めいた色を生み、精神的にも感情的にもキャンパスの真の中心を作っている。



Photo by Hiroshi Kobayashi

教員室棟のラウンジ

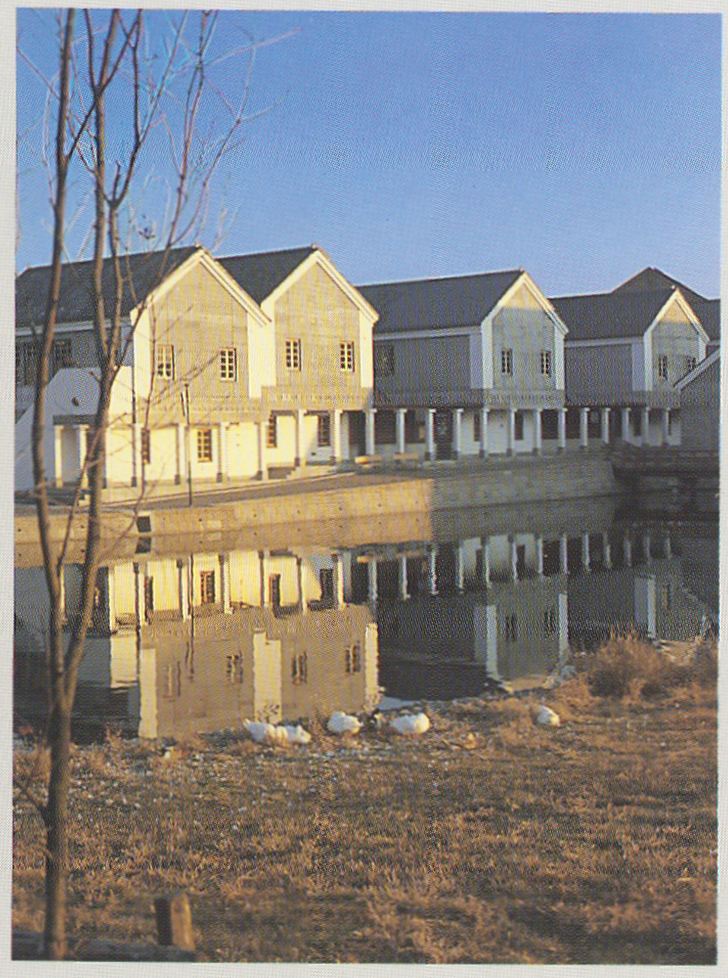
この建物はユーザーによる設計のたいへん良い例である。ユーザーの意志によく合った普通の建物である。基本的に萩原校長と書道の会田教諭によって設計された。

主要な内部空間としては、部屋の内側にぐるりと造り付けられた美しい木造ベンチをもつラウンジがある。そして折上げ天井と3面に窓をもち、1面は縁側、中庭に面している。ここは先生達にとって最も正式な集会の場で、重要な会議はここで開かれる。



ごく普通な教室棟

教室棟のもつ「全体性」の質はここでは特に「普通の質」Ordinary characterとして述べてみたい。教室棟はその単純さが最も著しい特徴であろう。その「普通の質」故に落ち着き、安心できるのである。しかし周辺との関係としてはけっこう複雑である。「小道」の側にはその1階に列柱を有したアーケードが設けられている。ホームルーム通り側には教室と床レベルの異なる木造のギャラリーが付随している。ここから生徒は通りをながめたりする。中心はやはり授業を受ける教室である。建物の外壁4隅にある白しっくいの柱型が秩序を促し、同時に楽し気な感じも与えてくれる。各々の教室棟毎に異なる装飾ブロックが独自性を主張し、木造ギャラリーのレッドウッドが通りに強い色を現し楽し気な雰囲気を醸し出している。



多目的ホール内部のポジティブ・スペース

ここではすぐれた内部空間における「中心」と「ポジティブ・スペース」について理解できるだろう。

中央広場からホームルーム通りに入るとその正面に下が白しっくい、上が木造の多目的ホールが見える。壁面中央のかなり大きな縦長の窓が上・下を結びつけており、強い焦点、「中心」をここに創っている。長手方向両脇には奥行き2mのたいへん厚い壁がある。この厚い壁(パタン・ランゲージ「厚い壁」参照)にはそれぞれ4つのアーチ状の入口がついている。各々の入口には両脇に2段のベンチがあり、またこれが入口としての性格を強めている。

内部は大きなオープンスペースとなっており、かなり印象的な空間である。曲線も含めた大きな小屋組が外からは予想もつかない落ちついた、重みのある、それでいて祝祭的な感じを与えてくれる。特に上から入ってくる光が廻り対しては閉じていて、上に向かって開いているという特別の空間感覚を与えてくれる。美しくカーブした小屋組、大きな天窓と光、大谷石のベンチのついたアーチ状の開口、材料と色の微妙な相互作用、光りの影等この建物はたぶんキャンパスでその「全体性」をよく具現している点で最も成功した内部空間と云って良いだろう。高校生にとっても休憩時間や放課後、雨天時には恰好の談話の場所となっている。

そして将来の大学領域とも、そのアーケードの一部と繋がっており重要な結節点となっている。アーケード側にはベンチのついた窓があり、将来はそこから大学生が多目的ホール内の高校生をながめるだろう。



体育館の材料のリアリティ

内部空間に対しては材料のリアリティという意味、そして外観に対しては人間的かたちと色の、ある局面を理解させてくれる。

池の一端、教室の横の目立つ場所にしかも池に浮かぶ様にその黒い姿を見せて建っている。この建物の外観、その雰囲気そして内部空間は通常の鉄骨造の体育館とはかなり違っている。まず第一に内部空間には大断面の木材を用い、材料のリアリティをよく現していることである。長手方向の構造は一尺角の米松の柱を両側に2列づつ並べて構成されている。短手方向にはこの4本の柱で小屋を組み16mのスパンを飛ばしている。又、長手方向には柱の間に観客席が設けられている。外壁は強い色の表情をもつ。木の柱や梁で適切に分割された壁面は黒しっくいで塗られ、その中に美しい窓を持っている。そしてワインレッドに塗られた巨大な屋根は敷地に最も強い色の印象を与える。色を使うことをためらわずに、むしろ敷地全体の色に関係づけて調和をみつける色を探っていく姿勢が大切である。





美術棟の彫刻室

どんな小さな空間でも大空間と同じ様に「全体性」を創り出すことはできるという例である。「人間的かたち」のルールの中では一連の形式の類似を意味する「エコー」echosとして注目できる。特別教室・美術棟の最も興味深い内部空間は彫刻室である。ここだけは他の壁構造の部分と異なり、美術の鶴巻教諭の特別の要望に応えラーメン架構と木造小屋組を隠さずに用いた。内部空間の質としては多目的ホールに類似しているが、より親しみある空間となっている。窓や天窓からの充分な採光や、室内に立ち並ぶ木の柱による構成と内部の機能とが、よく合っている。



武道場の多層構造

この建物の最も重要な特徴はこの種の建物が以前は持っていた精神性に立ち返り、空間を多層的に組織したことに依拠する。崖の上、その際に武道場は建ち将来の大学領域の一部を構成する。その上さらに基壇の上にそびえ建ち、下の集落からよく見える。田の字センター側から大谷石の階段を上り少々重い木製のドアを開けてレッドウッド羽目張りのちょっと暗い玄関に入る。ここで靴をぬいで幾段かまた上がると次の木製のドアがあり、ここを入ると中央にやや低く48枚の畳が敷かれている。さらに真向かいにはこの種のスポーツの精神性（伝統的にはスポーツとしては考えられていなかった）を強調する祭壇がある。この精神性はまた光が上方から入る様に配列された大きな高窓により強められている。この精神性の最も強い外観上の特徴は狭く細長い方向性、高さ、空間の層構造に表われている。、1層目の灰色のコンクリートの基壇、そして2層目は小窓が目の高さに並んだ黒しっくいの壁と重なっていく。この窓からはちょうど中の様子がのぞける。3層目は柱によって縦長に建物の高さが強調される様に分割されており、ここに高窓が並ぶ。最後に天候によって色も少しづつ変わる不均一な瓦屋根が最上層を成している。棟の両隅に鬼瓦が載り、他と比べやや軒も出ている。

この武道場を見て、最も驚くべきことは活発な運動の間にさえ落ち着いた雰囲気があることである。それ故にこのスポーツの精神性は強められ、昔ながらの質と意味を思い起こさせてくれる。





食堂と橋—中心パタン

ここでは、ひとつのスケール的に大きな建物とスケール的に小さな建物が重なり合って中心を形成するという例を説明しよう。また食堂というかなり公共的な建物が「アルコーブ」と呼ばれるパタンを用いてどの様にたくさんのプライベートな空間を作っていくことができるかも理解できよう。

中央広場と池をはさんで反対側の芝生広場の後の一番高い場所にキャンパス全体を見渡す様に食堂は建っている。食堂は外境内の、それも一面は敷地境界に沿う位置に、1階で30m 2階で12m の壁として一棟ポツンと建っている。同時に食堂は他の建物や主要な構造に強く結びついている。特に中央広場、池、大講堂、正門、教室棟、体育館とは建物や空地、景色や橋とともに強い中心領域を創りながら結びついている。特にこの場の焦点となるのは小さな中心である、美しい曲線を描いて池にかかる木の橋であろう。そしてこの橋によって食堂は他の部分と結びついているのである。

建物は木構造でキャンパスに向けて大きな窓をもっている。夕暮れに照明をつけるとこの窓が光り輝く宝石の様に見える。そして前面のダイヤ形の装飾の列が人を招いている様である。内部は通常の食堂と全く異質である。建物の後ろに沿っては全て小さな4人掛け程度のアルコーブが並び、心地良く食事や休憩ができる。又この小さなアルコーブは生徒にとって一種の隠れた場所、たいへんプライベートな場所として使われている。池やキャンパスに向かって8～10人掛けの大きな窓やドアのついたちょっと大きめのアルコーブがある。また2つの大きな部屋が多人数用に用意されている。そして2階にはもうひとつ部屋があり、ここからはキャンパス全体を一番よく見渡すことができる。

多様性の中の統一

キャンパスの主な場所を構造の異なる表現方式や段階に注意を向けながら、それぞれの建物や内部空間、ディテールを見て歩いていると、「全体性」もまた違う方法で表現できることに気付く。これを「多様性の中の統一」と表現しよう。キャンパスのそれぞれの部分、特に建物を比べるとそれぞれその建物での生活、空間自身そして独自性からして異なっている。どの建物もどのタイプの建物も隣りのものとは異なっている。しかしそれでも全てが疑いなく相互に集まって「全体」、更により大きな「全体」を作っている。「多様性の中の統一」はそれ故、より一般的な「全体性」という質の特徴である。

しかしもちろん、全てのスケールの「構造の段階や表現形式」に関して「全体性」を達成し得たのではない。このキャンパスを種子から育てあげてきた人達だけがその辺をよく承知しているだろう。しかし、ここかしこで、期待以上の「全体性」が達成できたものも、又それ以下のものもあるが、それでも現在の近代建築で得られる結果よりは、はるかに良いものが達成できたと信じている。

ハンスヨアヒム・ナイス（訳．塩原民雄）

C.アレグザンダー、H.ナイスの略歴は、データ頁（P.56）を参照



坂本勉氏、小林浩志氏以外の写真提供は日本環境構造センターによる。

●建築全体について

全体性をもつ
多様性の中の統一
木塀によって囲われ、内部に世界を形成
ほとんどの建物が何となく敷地の真中あたりに集まっていて
ひとまとまりの世界をつくっている

Architect Feeling Plan

INTERACTION

フィーリングプラン

設計者および観察者の言説の中で、具体的な建築の各部分について言及されている言葉を、図面上にほぼそのままの形で布置した。矛盾する言葉も矛盾するがままに並べている。読者諸兄の印象を加え、更に豊饒なフィーリングプランとすることを希いたい。

Watcher Feeling Plan

●建築全体について

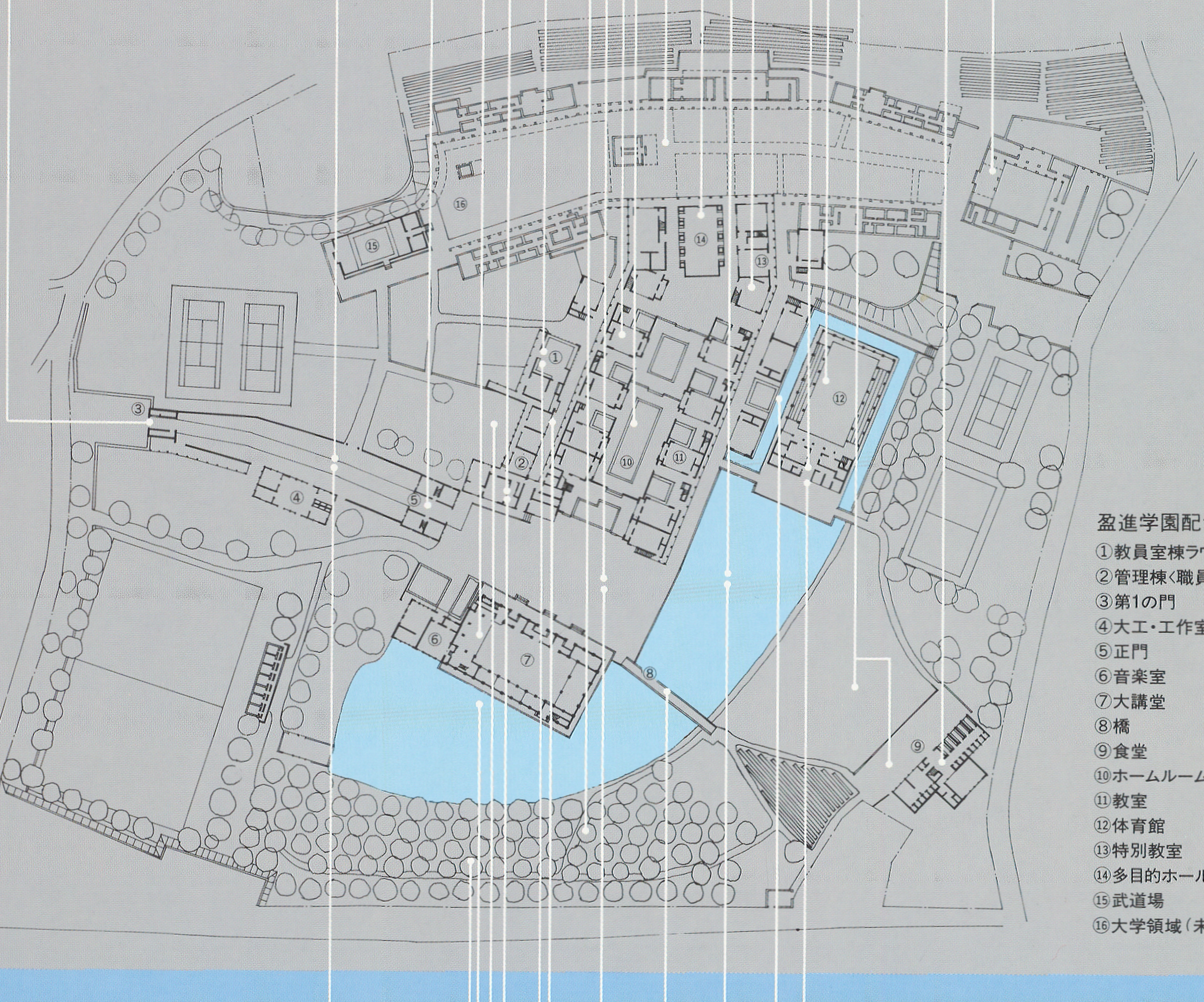
StraightでStaticな佇まい（野田）
アマチュアゆえの異化効果（井上）
不思議な不思議な町（富田）
不思議な空間体験（野田）
瓦が安っぽい（高.小田）
緑が少ない（富田）
派手すぎる（高.小田）
日本じゃない（高.石川）
オランダ村（野田）
江戸（高.佐藤）
大正（高.石井）
明治の村（高.今井）
木造で忍者屋敷みたい（高.小沢）

書割りの印象を与えるのは、建物の骨格をあらわすデザインが
骨太であるのに表層のデザインがポップだからである（市川）
見返り柳が似あいそうな場所もあった（森）
学校が巨大な姿で岡の上にそびえる（宇佐美）
きわめて管理しにくい空間（市川）
一日中遊びたくなってしまいそうな所（小林）
木でスッキリしてて、素朴でオチツク（高.小池）
自然さというものとは、ほど遠い人工的建築物（長谷川）
学生服の背景となった建物はStoick…色とりどりのドレスの
母親達が加わるとディズニーランド（野田）
遠く消えていった音は、再びよび戻され
豊かな音の風景をつくりあげている（庄野）
しろうとくささとヘタさが正々堂々とおさまっている（井上）

抽象的な建造物が建ち並ぶジャンタールマンタールの全体を思わす（宇佐美）
都市という多様性と対比する単一的なるものとして映しだされる（長谷川）
空間の中に日常を「異化」する契機を内包…独特な空間体験が、
聴覚体験にも生気を吹き込んでいる（庄野）
書割りじみた囲いがあって悪所のようでありながら外の風が通り抜け（森）
どの様に変転しても必ず戻っていく基本の調律を懐孕した空間（野田）
周囲の風景とは異質――と同時に相互の嵌入がはかられている（市川）
静かな乾いた固い、そしていく分かの淋しささえ感じさせる町（富田）
静寂な芝居の書割りや建築模型を拡大したような乾いた空間（長谷川）
互いの存在を認めつつ、自らの生を力強く肯定し得る音風景（庄野）
ひとことでいってキッチュだが、それなりの活気がある（井上）
外を歩く我々には家の中の活気が伝わってこない（富田）
歴史のなかで我々に刻み込まれている様々な形をくみ合わせてつくられて（井上）

高校生の領域
広く、生き生きとして陽光に満ちた通り
「普通の質」―単純さ
主要な軸線・重なり合う「大きめの構造」
落ちついた厳粛な雰囲気
将来うっそうとした森になる
先生にとっての焦点
ユーザーの意志によく合った普通の建物
「ふさわしい施工」
「中央広場」から「小道」への繋ぎ
より大きなセンター・色の装飾
キャンパス全体のコミュニティの象徴
「玄関道」から「中央広場」への繋ぎ
「ポジティブ・スペース」の代表
たいへん静寂な場所　授業に向ける心の準備
「主要な入口」「玄関での場面転換」
「良い形」のアーチ
親しみやすく単純・素朴

種々な構造の段階により構成されている
通り全体―テラス―中庭
重なり合う「大きめの構造」
大学生の領域（学園の本質的中心）
幾つもの層を越え最終的に到達する中心
ホームルームの中心
内部空間における「中心」と「ポジティブ・スペース」
「厚い壁」
「ホームルーム通り」から「大学領域」への繋ぎ
池は、内境内と外境内を結び付け、かつ分ける
内部空間での「全体性」・「エコー」
池に浮かぶ様に黒い姿を見せて建っている
色に対する姿勢・材料のリアリティ
外壁と巨大な屋根の強い色の表情
最も生き生きした場所
他の多くの構造と結びついて中心を創っている
光り輝く宝石
大学回廊：大学の内なる聖域



盈進学園配置図
①教員室棟ラウンジ
②管理棟〈職員室〉
③第1の門
④大工・工作室
⑤正門
⑥音楽室
⑦大講堂
⑧橋
⑨食堂
⑩ホームルーム通り
⑪教室
⑫体育館
⑬特別教室
⑭多目的ホール
⑮武道場
⑯大学領域（未完成）

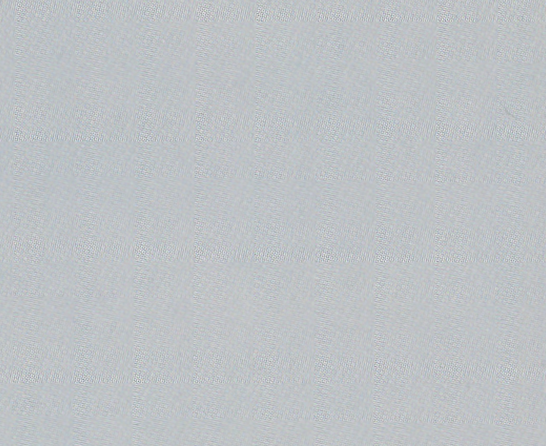
まず大講堂の姿が目にはいる（井上）

寺の参道の様（富田）
風景が微妙に変化（市川）

森が少ない（高．小池）
スケートできる（高．今井）
ボォッとしてる時が好き（高．石川）
なまこ壁が上部にあしらわれているところなどちょっとあきれてしまう（井上）
いかにも田舎の分校を意識した（小林）
窓ごしの会話を許す雰囲気（市川）
砂利を避け側溝の上を歩く自分に気付く（野田）

体育館が池に浮かんでいる（高．荒木）
お堀（小林）
静かに動く水が安らぎを与える（市川）
真中辺にいる時が1番いい（高．荒木）
池がすき（高．小沢）
キレイだったら絶好調（高．石井）
なぜ池なの（野田）
人間にとって最も基本的な象徴に満ちた水の音（庄野）
どうかと思わざるを得ない（井上）
足音が重なり合い生まれるリズムは一回限りの輝かしい音楽（庄野）
日常のタイムスケールの外にはぐらかす装置（庄野）
空間構成のドラマツルギーの演出（井上）
そこに撮映所がありました（小林）
ウェネツィアのドゥカーレ広場を思わせる（井上）
明るく陽光の射す中央広場（野田）

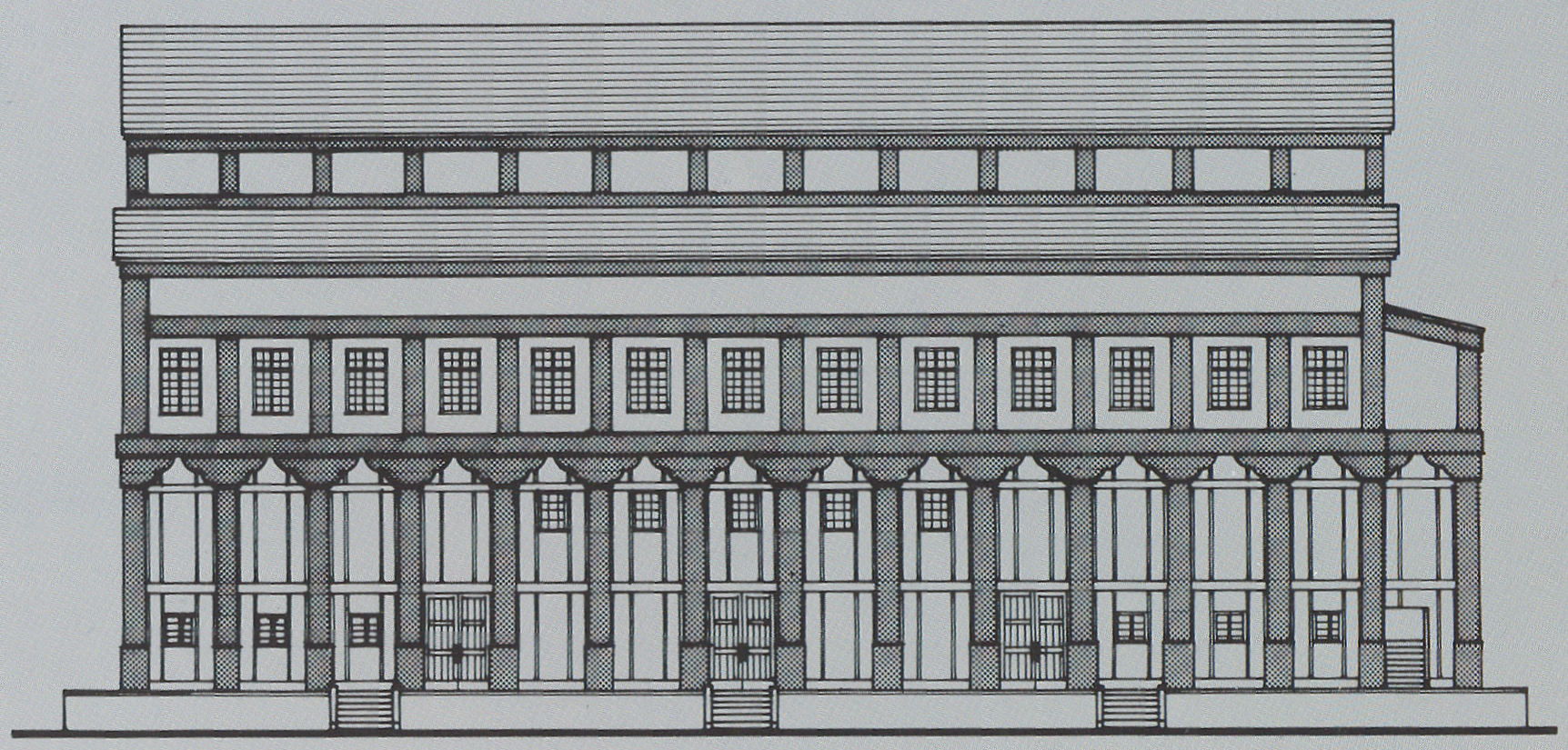
やや暗くて力強い一種日本の伝統的な精神性
粛然、神秘的



第2の門〈正門〉立面図

第1の門から見た時は押しつけがましく、食堂の2階から見た時は可愛らしく見えるが
強い印象を与え象徴性に富んでいる（市川）
和洋折衷のカキワリのような門（小林）
反りのある瓦屋根を載せた正面はとてもキュートだ…
"CHESS MOVES"に流れるマリーヘッドの曲（野田）

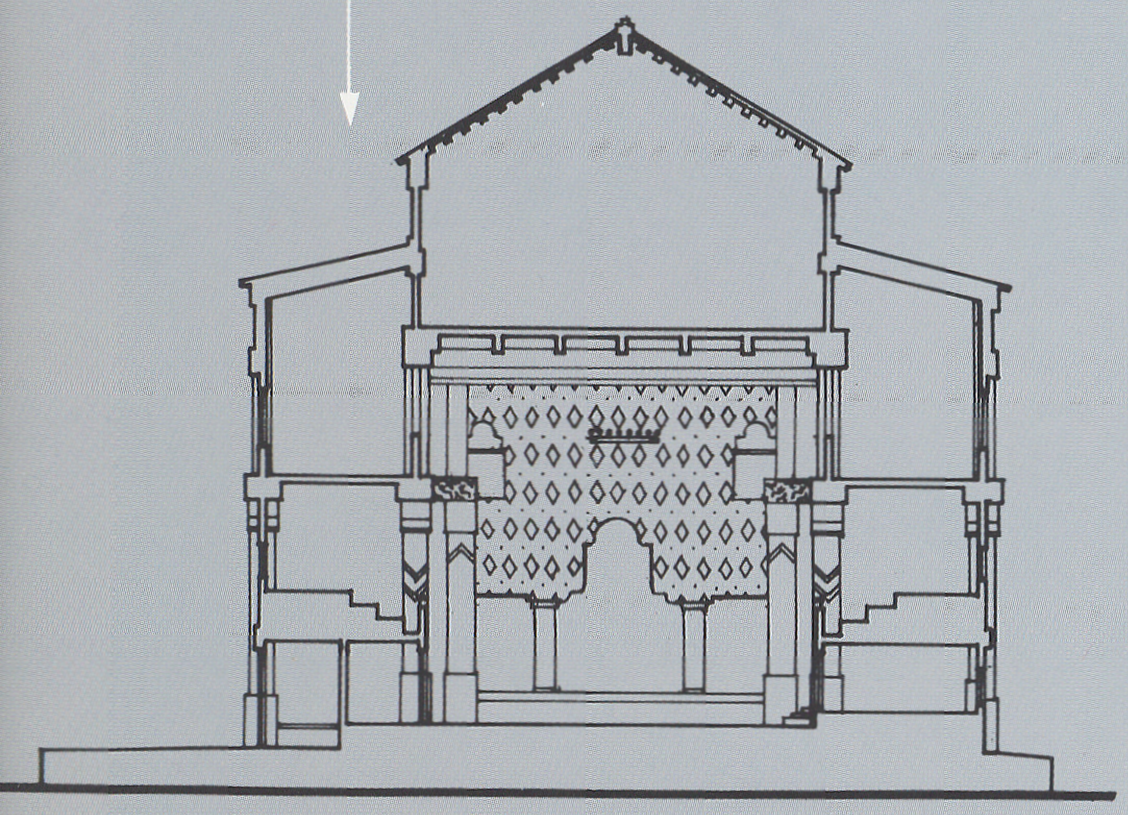
かなり威圧的でさえある
太い柱とその上の大きな柱頭は堅固なしかもキャンバス全体に統一感を与えて



大講堂南側立面図

固く扉を閉ざした講堂はどこから入って良いのか分からない（富田）
大きさにもかかわらず威圧感を与えない（市川）
異様な姿である…えもいわれぬ曖昧さを漂わせる（野田）

我々独自の色彩計画理論が適用
儀式めいた色



大講堂断面図

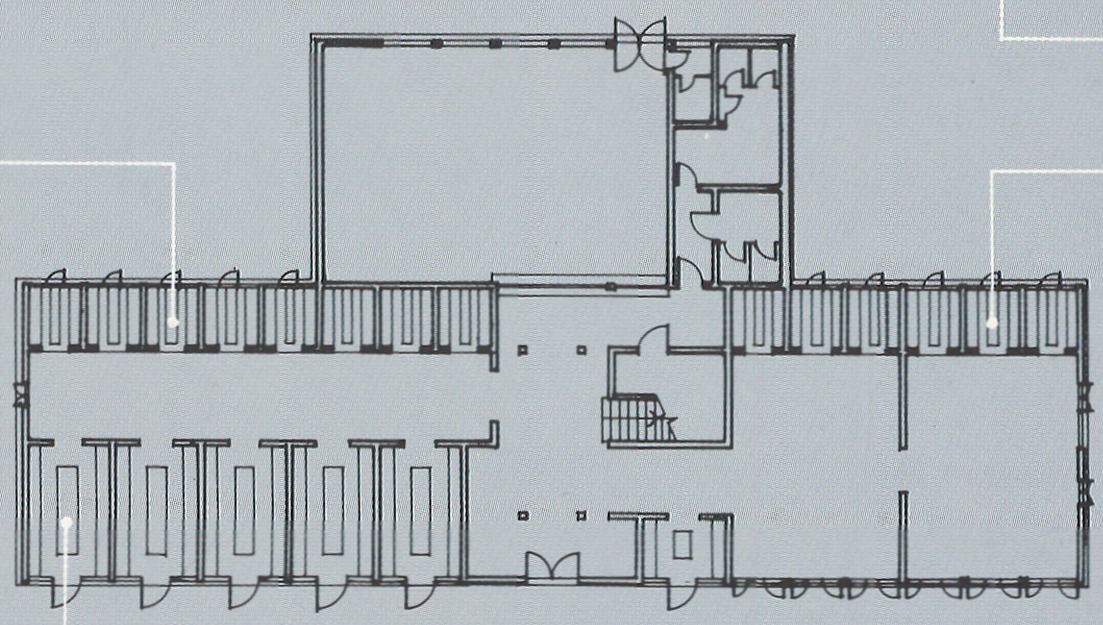
めちゃくちゃなおかしさ（で良い）（富田）
トランプのダイヤのお城（市川）
サイテー（高，石井）
不気味な赤い色も塗ってあったって（高，石川）
前の方が良かった（高，小沢）
渋さとポップな草花のデザインの奇妙な対照（市川）

たいへんプライヴェートな場所

ダイヤ形の装飾の列は人を招く
光り輝く宝石



食堂東側立面図



食堂1階平面図

ひさしでおおわれたテラスがあったら
どんなに楽しい食事風景が見られたろう（富田）

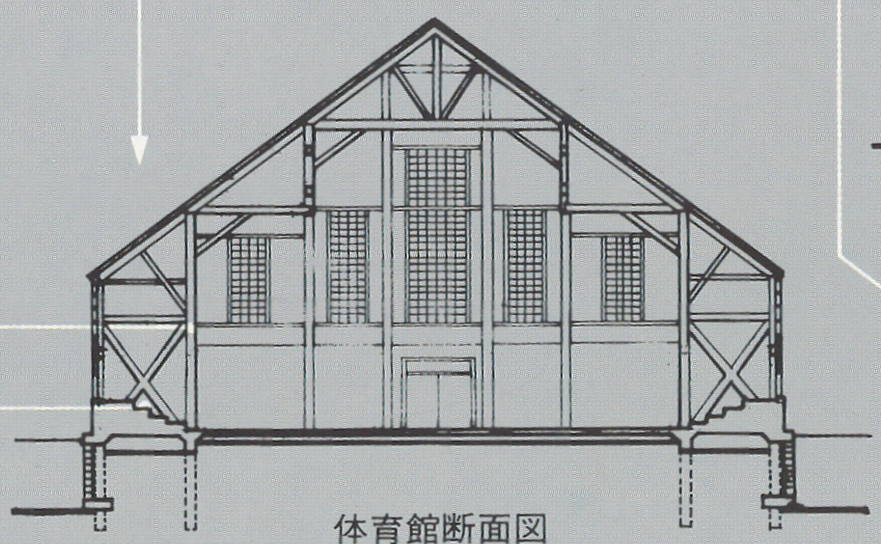
隠れ家のイメージ（市川）
個室喫茶（高，石井）
外を見るのが好き（高，佐藤）
我々はここで生徒達と一緒にピクニックをしたのだ（富田）
親しみやすい一郭（市川）

バスプールが見え楽しい（市川）
飯事遊びに興じる若い恋人関係（野田）

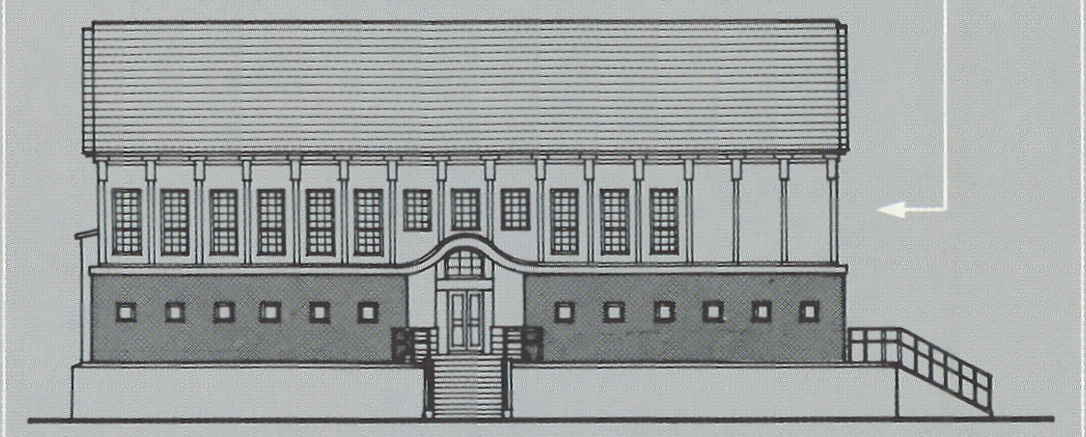
赤と白のモザイクでいろどられた建物（井上）

落ち着いた雰囲気、伝統的スポーツの特質が強められ
「多層構造」

大断面の木材を用い材料のリアリティを良く現している
外壁は強い色の表情をもつ



体育館断面図



武道場北側立面図

変化に富んだ窓を通して風景を切り取る時、
見慣れた光景が鮮やかに立ち現れる（庄野）
内部は明るく、入口の曲線と相まって根性一筋の
修練の場という印象はない（市川）

好き（高．小池）

軽い異和感と、習慣化した空間感覚からの
開放を与えてくれる（市川）

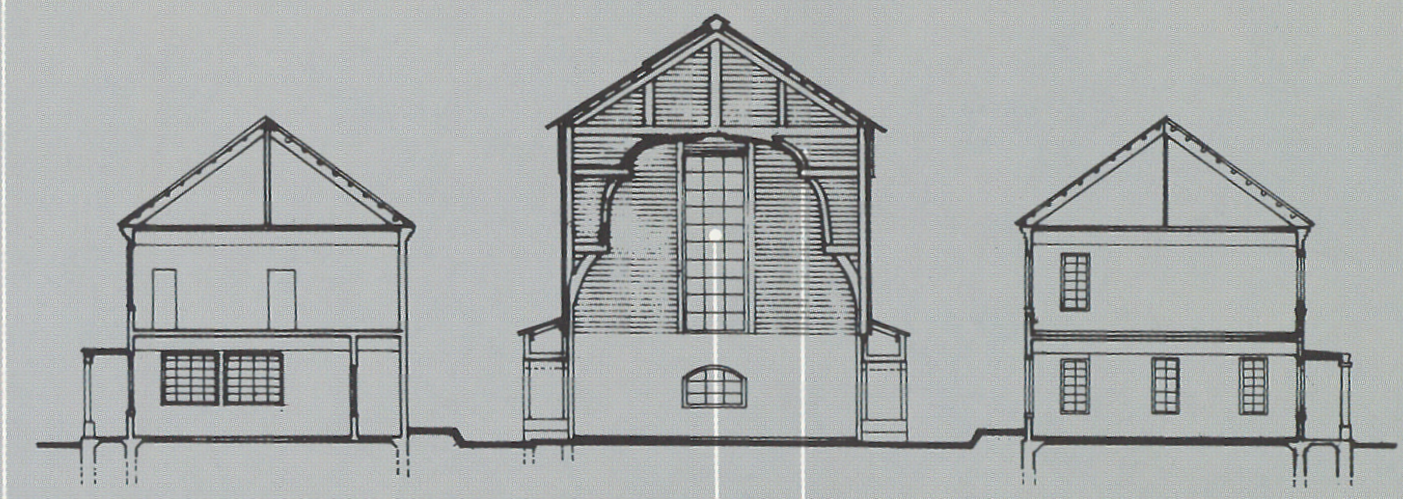
不安定さを内蔵してダイナミック（市川）
そこから飛ぶと顔打ってイタイ（高．石井）
木の組み方がすごいキレイ（高．石川）
芸術品っていうか、凝ってる感じ（高．石井）

ふしぎな魅力（富田）
あの、すごい、なかなかキレイ…うん（高．石川）
上昇する力を伝える（市川）

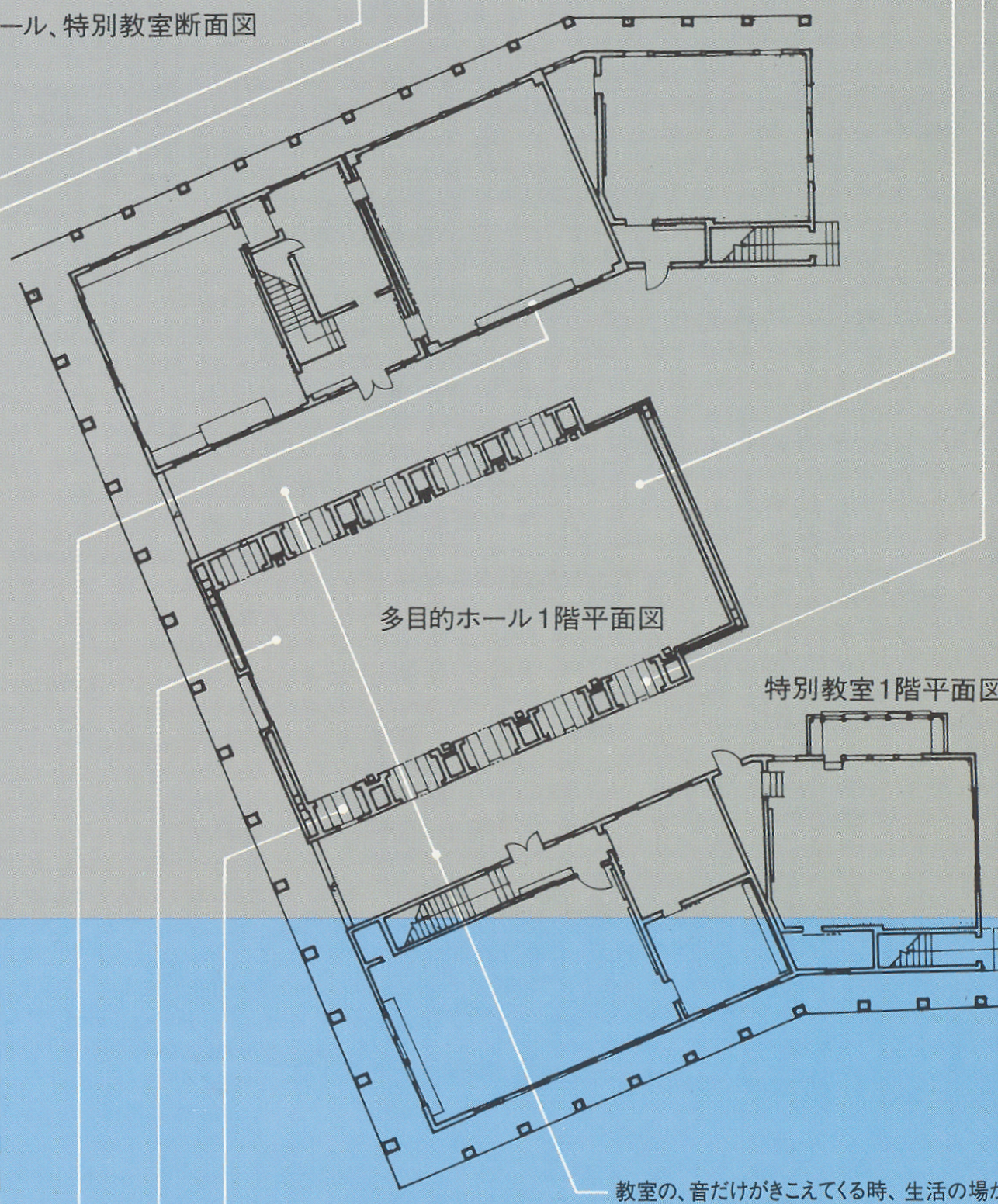
店先のように作れなかったのだろうか（富田）

「厚い壁」
ベンチが入口としての性格を強めている

静かで、おごそかで、それでいて祝祭的
上に開いているという特別の空間意識を与えてくれる



多目的ホール、特別教室断面図



多目的ホール1階平面図

特別教室1階平面図

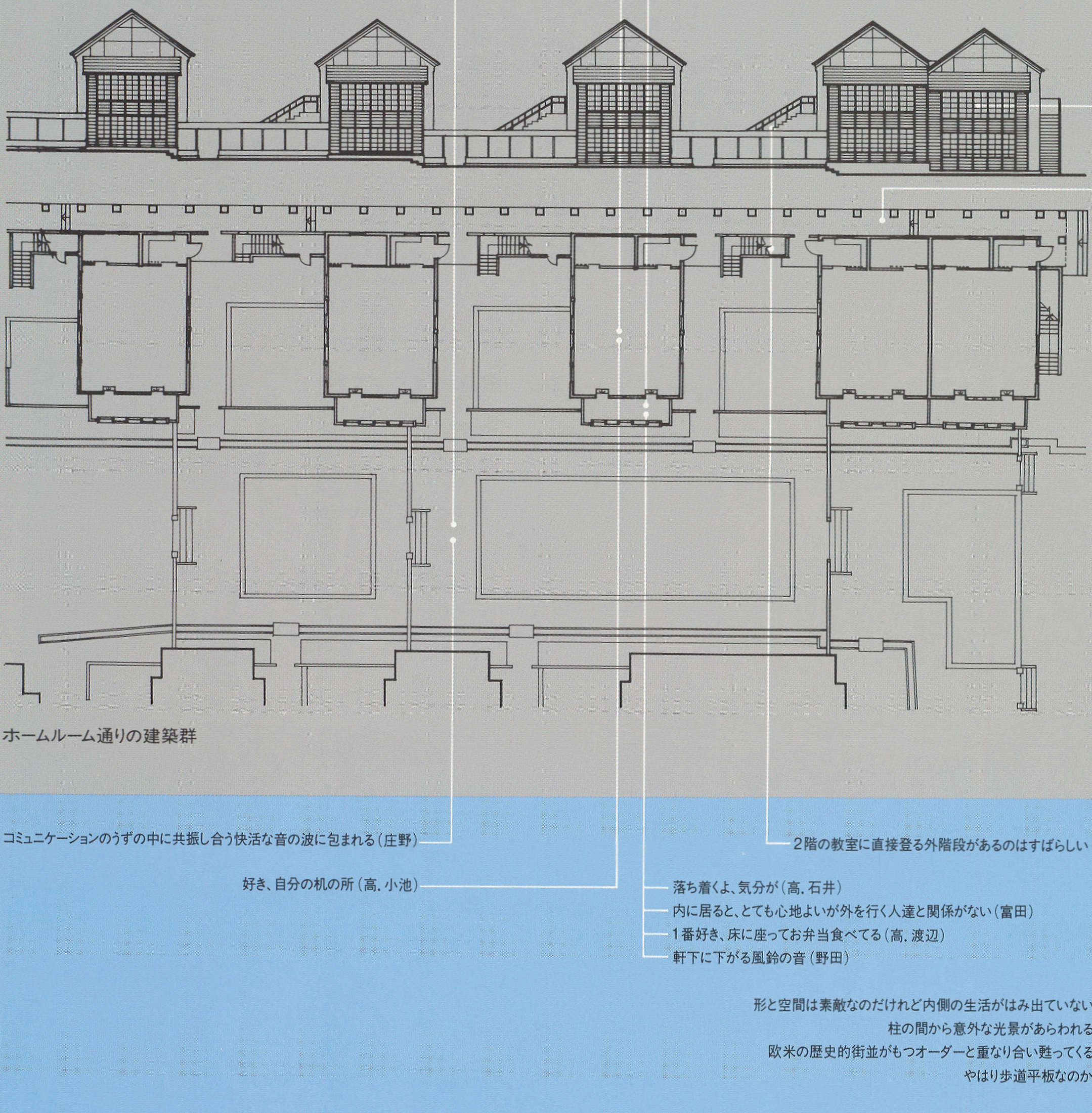
教室の、音だけがきこえてくる時、生活の場が
日常の枠からぬけ出たところで体験される（庄

等身大の隠れ家といった安心感（市川）
腰かける場であると同時に、音を聴く場でもある（庄野）

超身大ともいうべききわめて劇的な空間（市川）
ふしぎな魅力（富田）
白壁に残るドッジボールの水玉模様――共生の発芽（野田）

外壁4隅の白しっくいの柱型が秩序を促し、同時に楽し気な雰囲気を与える

教室棟毎に異なる装飾ブロックが独自性を主張



ホームルーム通りの建築群

広く、生き生きした陽光にみちた

「普通の質」ゆえに落ち着き

通りに強い色を現し楽しげな雰囲気を醸し出して

コミュニケーションのうずの中に共振し合う快活な音の波に包まれる（庄野）

好き、自分の机の所（高、小池）

2階の教室に直接登る外階段があるのはすばらしい（富田）

落ち着くよ、気分が（高、石井）

内に居ると、とても心地よいが外を行く人達と関係がない（富田）

1番好き、床に座ってお弁当食べてる（高、渡辺）

軒下に下がる風鈴の音（野田）

形と空間は素敵なのだけれど内側の生活がはみ出ていない（富田）

柱の間から意外な光景があらわれる（市川）

欧米の歴史的街並がもつオーダーと重なり合い甦ってくる（野田）

やはり歩道平板なのか（野田）

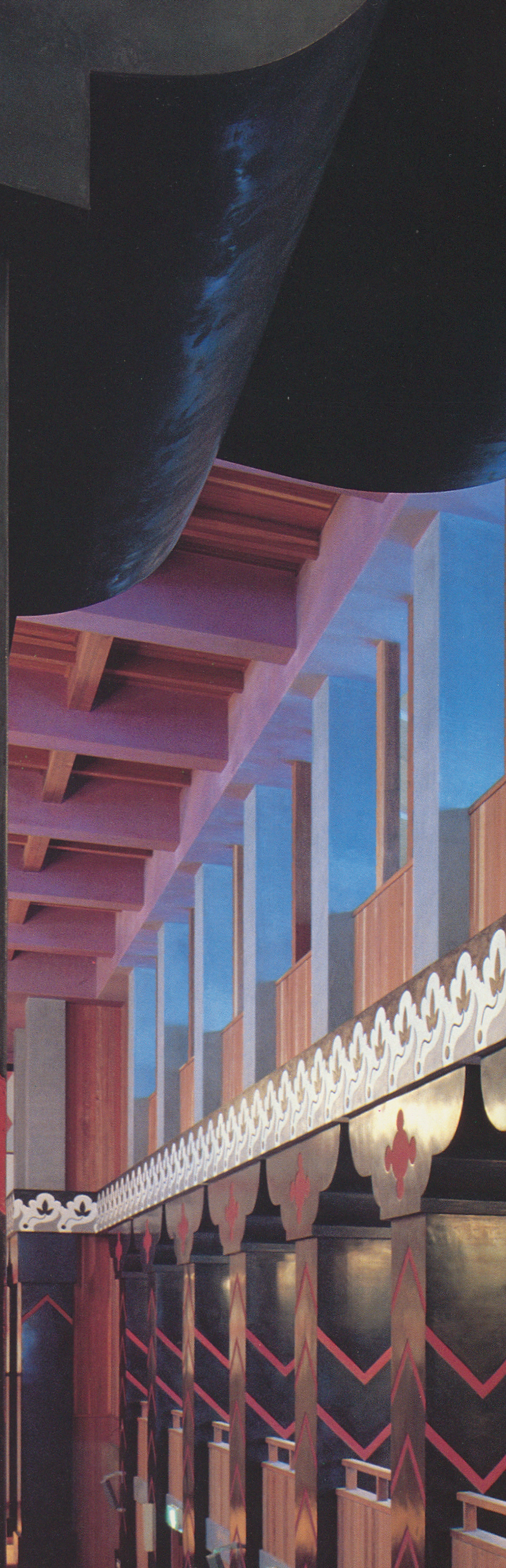
木枠の窓からは音がやさしく侵入してくる（庄野）

From Watcher

小林浩志 写真家
坂本 勉 写真家
梶 洋哉 写真家
市川 浩 哲学者
森 毅 数学者
庄野泰子 音楽学
宇佐美圭司 画家
小林洋子 役者
長谷川逸子 建築家
富田玲子 建築家
野田俊太郎 建築家
井上章一 建築史

高校生

石井悦雄
今井 真
小沢 厚
小池直美
佐藤美智子
荒木智広
石川ゆき
小田光直
渡辺恵美



小林浩志

写真による解読

小林浩志(こばやし ひろし)
1947年 東京生れ 写真家 出版社での編集を経て、現在、フリーにて写真撮影を行っている。1985年ギャラリーアトリウムを同人とともに開設、毎月10日間の写真展、「Paper Clips」を行っている。

Photo by Hiroshi Kobayashi

Photo by Hiroshi Kobayashi

坂本 勉

写真による解読



坂本 勉(さかもとつとむ)
1944年　満洲生れ　写真家　「光の化石展」ポスターに対し、日本グラフィックデザイン展'81ポスター部門金賞受賞
'81年写真集「その時、風が4人の胸をクシ刺しにした。」にて都会に生きる人々の姿とその一瞬の生を捉え、発表。
現在、人物撮影を主とし、'83年より継続して、新宿、原宿等のディスコに集まる20歳前後の若者達のポートレイト集を制作中。

Photo by Tsutomu Sakamoto





Photo by Tsutomu Sakamoto(2点とも)

梶 洋哉

写真による解読

梶 洋哉(かじ ひろや)
1947年　沼津生れ　写真家　作品に「日本凡人伝」「東京劇場・ガタリ、東京を行く」
ポストカード、ビデオ「SO・RA・E」等があり、複合された写真の表現に興味がある。

Photo by Hiroya Kaji









Photo by Hiroya Kaji(4点とも)

市川 浩

建築ではなく……

市川 浩(いちかわ ひろし)
1931年 京都生れ 哲学者 明治大学教授 著書
「精神としての身体」「ベルグソン」「〈身〉の構造」「現代芸
の地平」他があり、身体を思索の軸としつつ新たな〝コスモロ
ー〟の有り様を様々な表現行為を通じて探っている。

初めて訪れたときは、建築と平面プラン(大学部分はまだ手がつけられていない)を追っていた。今回はちがったものが、つまり学校が見えてきた。これは建築ではない、学校なのだ。建築の世界にいると、この当然のことを忘れがちである。教育の世界にいると建築の構造や配置が、どれくらい教育のあり方や考え方を規制しているかに気づかない。こんなあたりまえのことを、改めて感じさせてくれる学校建築がどのくらいあっただろうか。

放課後、生徒が池にボートを漕ぎ出している。なだらかな緑の岸辺では、あひるが4羽毛づくろいしている。他の4羽は茂みで卵を抱いたり、休んだりしているのだろう。橋の向う側に残された茶畑(学校のまわり一帯は茶畑である)では、お茶の木を手入れしている人がいる。スピーカーから校内放送がひびく。「教員室から仔猫を借りて行った人は返して下さい」。生徒が捨て猫を拾ってくる。もらい主がみつかるまで教員室で育てていると、猫好きの生徒が借りにくる。食堂では見事な黒猫が身をひるがえして逃げて行った。何をあさっていたのだろう。

教員室の前の砂利道を歩いていると、先生が気軽に声をかける。窓ごしの会話。そんな雰囲気なのだ。部屋のなかにはもうハエ取りリボンが下っている。向う側の空地には、雑草が勢よく茂っている。昨年の夏、草ぬきに追われた先生がため息をつく。「羊でも飼わなくちゃ」。今は羊のかわりに大きな犬がいる。名前は〈ポー〉。登校するとまず犬と遊んでから教室に入る生徒がいる。教員室の軒下には網に入れた球根がぶら下り、子供用の赤いビニール・プールに水が張ってある。教員室にあひるがいるのだ。池のあひるが卵を生んだ。1個がかえったが、人工孵化で親への刷り込み(インプリンティング)がないせいか、池に放っても仲間となじめない。もう少し大きくなってから池に放そうと、ビニール・プールで泳ぐ練習をさせているのだ。

もちろんこんな牧歌的な風景がすべてではないだろう。多くの高校と同じ難題をかかえているにちがいない。しかし、こうした風景がこの高校の一つの姿であることもたしかである。

といって建築が自己主張していないわけではない。むしろ周囲の風景とは異質な空間を作り上げている。開校当時の評にもあったように、映画のセットか、和洋折衷の出島といった趣きなのだ。周囲と調和するというよりは、城郭をめぐらしたヨーロッパ中世都市のように、区切ることによって周囲と分離した独自の空間を形づくっている(と同時に校内にある二つの茶畑のように、相互の嵌入がはかられていることもたしかだ)。

独自の空間を作るには、その軸となる理念がなければならない。それが〈学校〉という理念である。それも上から与えられた〈管理のための学校〉ではない。教職員や生徒から「どういう学校がほしいか」を聞き取りしながら形づくっていった理念である。その集成を個々の場所のキー・コンセプトとして抽象して行ったのが、パタン・ランゲージである。これは専門家からみれば、あいまいなたわ言(ここからただちに形はみちびかれない)かも知れないが素人には分かりやすい。パタン・ランゲージは、建築家とユーザーが話可能な中間レヴェルの言語——建築言語と日常言語の境界にある言語——といってよいだろう。このような中間言語の創出が、単なる調査、建築のための基礎資料の収集にとどまるなら、従来の建築過程を大して変えはしない。アレグザンダーの思想のもう一つのキー・ポイントは、設計過程はなかば建築過程であり、建築過程はなかば設計過程である、といういささか古典的かつ理想主義的なアーキテクト・ビルダーの概念にある。アレグザンダーは両者を密接に結びついたものと考える。そのために現地に建物のサイズと配置を示すポールを立て、白いテープを張りまわしてユーザーに示したり、縮尺模型はもちろんラフな現寸模型を幾つも作ったりする。じっさい最初に訪れたときは、講堂の柱の塗りはまだ決まらず、いろんな色や模様の紙が柱に貼りつけられていた。現場での効果を確かめながら仕上げてゆくわけだ。

非能率的でまだるっこしい手法である。建築の経験が少ないとはいえ、あらかじめ模様や彩色を決めることぐらい出来たはずである。だからこれはアレグザンダーの理念から来ているといっていいだろう。パタン・ランゲージの特徴は、形やイメージではなく、フィーリングをあらわす言葉が多いことである。形やイメージならともかく、パタン・ランゲージに集約されたくディープ・フィーリング〉に達するには、たえず建築過程での発見と再調整が必要だというわけだろう。建築物ではなく、学校を建てるのだという観点に立てば、これはまったく正統的な方法にちがいない。

芝居の書き割りや映画のセットといった印象を与えるのは、建物の骨格を外にあらわすデザインが骨太、簡勁あるいは端正であるのに、それに付加された表層の色やデザインが、ポップであり、日本や西欧のさまざまの時代の色の好みやデザインが混淆しているからである。それだけにあっけらかんとユーモラスである。雑種文化に育った日本人は、なじみ深い表徴をあちこちに見つけ、どこか違和感をおぼえながらも、このデザインを消化してしまうのではないだろうか。

これは第一印象である。校内を巡るにしたがって別な印象が生まれてくる。身体感覚をめざめさせる空間なのである。第1の門と第2の門(正門)は一直線上にはない。門の脇の塀越しに、また入口をすかして見えかくれする風景は、歩むにつれ、舗石にみちびかれて方向を変えるにつれ、微妙に変化する。市松模様の正門は、第1の門から見たときと、小高い食堂の2階から見たときでは、ひどく印象が異なる。前者は押しつけがましく、後者は可愛らしくみえるが、いずれもきわめて強い印象を与え、象徴性に富んでいる。

正門をすぎると広場が開け、左に管理棟や教室群、右に巨大な大講堂、前面に池と緑の斜面をへだてて食堂が見える。これらがすべて蔵や倉庫を

Photo by Hiroshi Kobayashi



想わせるのは、なまこ壁や白壁もさることながら、ほとんど庇がないことによるようだ。

大講堂はその大きさにもかかわらず威圧感を与えない。淡色の色彩と、貼りつけのように平面化した迫持のデザインによるのだろう。内部は、多くの柱をもつ内部回廊のせいで、三つの大架構のうちでは、もっともスタティックな印象を与える。最初訪れたとき塗られていなかった柱は、漆黒と漆朱に仕上げられ、なかなか渋いが、上縁のポップな草花のデザインと奇妙な対照をなしている。ステージにいたっては、トランプのダイヤのお城、まるでディズニーランドである。

大鼓橋をへて食堂へとゆるい登り坂をすすむにつれて、左手に見える風景がたえず変化する。食堂の1階両側にある大・中・小のアルコーヴは、ヨーロッパの列車のコンパートメントにも似て、親しみやすい一郭を形作っている(鳥の巣・水呑み場・隠れ家のイメージ)。裏側のアルコーヴからはバス・プールが見え、楽しい。2階からは、西は校舎全体、東は茶畑のつらなりを見渡すことができる。この両側の印象の落差がますますキャンパスの出島風の印象を強める。

食堂から緑地のなかの小道を下りゆくと小橋を渡って体育館である。体育館は池に面し、まわりを堀割りでかこまれている。静かに動く水が安らぎを与える。体育館内部の大空間を支える木組みの入り組んだ力線は、不安定さを内蔵していてダイナミックである。

もう一つの橋を渡ると教室群である。各教室(ホームルームは40名教室)は独立性が強く、それぞれ組担任の部屋(4.5〜6畳)が付属している。2階の教室は外の階段から直接出入りできる。1階の回廊は外へ開かれているから、内廊下(「廊下を走ってはいけません!!」)にあたるものはない。教室棟の棟と棟の間から、また途中で軽く折れているため見通すことができない柱廊の柱の間から、意外な光景が現れる。回遊式庭園のように、「見通すことができない、だから思いがけない出会いがある」というのがこのプランの特徴である。2列の教室群の間の空間(ホームルーム通り)も、門のついた塀で三つに仕切られている。

ホームルーム通りの奥に多目的ホールがある。これは超身大ともいうべき、きわめて劇的な空間である。弯曲した控えを内部に構造化した天井の木組みは、下降する力というよりは、むしろ上昇する力を伝えてすばらしい。それをタテ長の巨大な窓が強調している。この窓や体育館の窓、講堂のドアのプロポーションは、われわれのものとは異質であり、それが身体感覚に軽い違和感と、習慣化した空間感覚からの解放を与えてくれる。超身大の空間にたいして、下のアーチ状の開口部にもうけられた腰かけ風の台石、同じくアーチ窓のついたアルコーヴなどは、等身大の隠れ家=休息所といった安心感を与えてくれる。この対比はアレグザンダーの特徴といえよう。

外縁をまわると武道場である。内部は明るく、入口の曲線と相まって根性一筋の修練の場という印象はない。さきにのべたように構造を表現するデザインと、表面に貼りつけられたポップなデザイン(体育館側壁上縁)や色(講堂外壁)や、曲線(武道場入口)が不思議なコントラストをみせて大規模建築であるにもかかわらず、軽やかな印象を与える。

茶畑、堀割り、池、ボート、あひる、犬、猫、見通せない柱廊、塀で仕切られたホームルーム通り、あちこちにあるコーナーやアルコーヴ……と並べてみると、これらが生徒にプライヴァシーを与え、安らぎをもたらす反面、きわめて管理しにくい空間であることが分かる。現存の学校建築の多くが、管理のしやすさを旨とし、つねに見張られていることを感じさせるパノプチコン(一望監視塔)に知らず知らず近づいていることを考えれば、こうした建築プラン自体が、生徒の〈自立〉と〈自律〉という教育理念なしにはありえないことがわかるだろう。また構造自体がそうした教育理念を要求している。じっさいこの学校では、新校舎への移転にあたって校則を全廃している。

こうした発想のきわみが、パタン・ランゲージ7-⑦に出てくる「秘密の園」である(まだ実現してはいない)。この庭は敷地計画にも印されず、木と生け垣で2重にかくされ、外からは行きどまりのようにみえる。中には灌木と大きな石と木の切株がある。木蔭に寝ころんで本を読んだり、友達と語らったり、「何人かでくれば、バーベキューをするかもしれない」と記されている。途方もない理想主義にみえるが、すでに実現した部分も、日本の現状からいえばそうなのである。さまざまの失敗や妥協があり、争いがあったとはいえ、また欠陥や未完の部分があるとはいえ、日本の学校の現状や建築界の状況を考えれば、非現実的というしかないこのプランを、とにもかくにも実現した理念と意志の力はわれわれを考え込ませる。やはりこれは建築ではない、学校なのだ。

森 毅

東野高校における時間の匂い

昔の学校時代を思いうかべるとき、思い出としてあるのは、先生が優しかったり恐かったりしたことでもなければ、仲のよかった友人たちとのエピソードですらない。まして、そこで学んだ授業の一こまなどであるはずもない。それは校庭の隅の大きな木であったり、教室から脱けだしたときに隠れた小屋の匂いだったりする。

学校というところで、なにかの知識を得たり、なにかの技術を身につけたりすることになってはいるが、それは表面的なもので、それらは学校を出ると急速に失われる。そうした知識を忘れ、技術を失ったあとで、残っているなにものかが、本当に学校から与えられたものなのだろう。それは、大きな木のかげりや小屋の匂いとともにある。

学校という建物を、知識や技術を与える機能で考えるのは、学校教育というものについての表面的な考えから来ていよう。このごろ、狭くなった大学が郊外に移転することが多いが、たいていうまく行かない。町の中にあって、町の匂いとともに学生が暮らしていたのが、匂いを失うことで機能だけが裸になってしまうのだろう。そうかと言って、もうこのごろでは、郊外に新しい学校を作るよりあるまい。郊外は郊外なりに、自然があるのだが、そこで学校という人工的な存在が、どう土の匂いに溶けこむことができるか。

教育というものが、そのときの効果より、数十年後からの思い出を大事にするように、学校の建物もまた、数十年の期間ではかられるものだろう。新築のときは人の目を引きながらも、急速につまらなくなる建物もあれば、できたときにいくらか奇異に見えながらも、歴史のなかで土地に根をおろしていく建物もある。最初が新しいのは仕方のないことで、たとえば数十年後に再び東野高校を訪れることを空想しながら、今の建物を眺めるより仕方はないのだが。

今のことについては、この高校は近所の老人たちの散歩のコースになっているそうだ。近くの自由の森学園あたりの高校生が、遊びに来ることもあるという。これは、一見は塀がめぐらされて、囲われた空間のように思われるこの建物にとって、おもしろいことだ。囲われながらも、外からの流れが自由に入ってくること、それは学校というコンセプトにふさわしい。



Photo by Tsutomu Sakamoto

森 毅(もり つよし)
1928年　東京生れ　数学者　京都大学教養部教授　著書に「数の現象学」「文化の中の数学」「ものぐさ数学のすすめ」「学校とテスト」「世話噺数理巷談」「三びきのこぶた」「ゆかいな参考書」他多数があり、『学校ファシズムなんて笑っちまえ』を持論に、広く教育についてかたっている。

現実のたいていの「学校」は、この反対のことが多い。一見は「開放的」な印象を与えながらも、そこは外部からの侵入を拒否している。ぼくの学校時代だと、そのかわりに生徒が外部へ脱出したものだが、当節ではそれすら監視されている。見通しがよいというのは、よく監視されているというに過ぎぬ。学校とか、教育とかいったものが、人工的であるのは当然であって、自然公園めいた偽善的自然を作っても仕方ない。生き生きした子どもがひろびろした野原を走る、といった政党の選挙ポスターにでもありそうな世界を、よい教育環境のように錯覚する「教育者」はまこと度しがたい。ついでに、このごろ作られる大学が、やたらと芝生を作りたがるのに、ぼくは少しうんざりしている。アメリカの墓場みたいではないか。同じ墓場でも、トランシルヴァニアならドラキュラが、四谷左門町ならお岩様が風情を与えてくれぬでもないが、このごろの大学と来たら、ギャングがサンドイッチを食べるぐらいしか様にならない。そこで、東野高校については、なにやら書割りじみた囲いがやたらとあって、悪所のようでありながら外の風が通りぬけ、いまはまだ新しいけれど、数十年もたてば妙な木が茂ったり、予定しなかった小屋が作られたりしそうな予感がする、そこが好きだ。教育が未来の時間を先どりしているからには、学校もまた未来の時間を先どりしてよい。もちろんそれは、未来計画といったものの反対で、いわば数奇な運命の予感というものに過ぎないが。

教育というのは、人間が人間の論理を押しとおすこともできず、さりとて自然の論理に埋没するわけにもいかず、なんとかやりくりしながら一生を送る、その人生の時間を予感的に先どりするものとしてある。いろいろと知識を得ては忘れ、技能を身につけては失い、それでも未来への予感として時間の匂いを嗅ぐ、そうした若者たちにとっての廓が、学校なのだ。そう言えば、まだ木があまり入ってないが、ここには見返り柳が似あいそうだ、などと思えた場所もあったっけ。

学校にはなにより、時間の匂いが必要だ。まだ、現在の東野高校としては、時間の匂いの予感というほどのものかもしれないが、予感すら消去した無時間的な「学校」が多いなかで、あの学校へ行くと気持ちがやわらぐ。



Photo by Tsutomu Sakamoto

庄野泰子

C.アレグザンダーを聴く

茶畑に囲まれたこの学園で最初に耳にするのは、石畳の小道に響く自分の靴音である。都会の喧噪の中ではほとんど気に留めることのない、自分の足音を改めて感じながら、第一の門、そして正門をくぐりぬけると一面の砂利。アスファルト舗装にスポイルされた足は、この砂利道の中で逡巡する。せかせかとしたいつもの歩行のテンポを、いやが上にもにぶらせる。ひと足踏み込むごとに、小石の擦れ合う音、弾ける音に耳を傾けながら、これは我々を日常のタイム・スケールの外にはぐらかす装置なのではないかと思えてくる。やがて碧空（あおぞら）を鏡のように写す池、流れ込む水。ここには人間にとって最も基本的な、そして象徴に満ちた水の音がある。無限に変容する水の音は、他の何にもまして、我々に大きな喜びを与えるといわれている。生命の起源から、人間の歴史から、決して切り離すことのできない原音風景（オリジナル・サウンドスケープ）の基調音である。池にかかる太鼓橋。この木造りの橋を渡る数人の足音が、重なり合い偶然に生まれるリズムは、一回限りの輝かしい音楽だ。池ではボートを漕ぐオールが軋み、淡い水しぶき、そしてにぎやかな歓声……これらすべてが入間（いるま）の高く広い空に吸い込まれてゆく。コンクリートの狭間で反響音が鋭く耳を裂く都会の校舎とは異なり、音は軽やかに拡散し、ここではどんな音をも歓迎できるに違いない。この広い空を風が吹きぬける時、また砂利道に雨がしみ入る時、学園の木枠の窓からは、それらの音がやさしく侵入してくることだろう。ともするとアルミ・サッシは騒音を閉め出す代償に、室内の音風景を貧しいものにしてしまっているが……。何くれと無い日々の中に織り込まれながら、日常に変化を与え色どりをそえていたこれらの音、そしていつしか我々の生活の中から遠く消えていったこれらの音は、アレグザンダーによって再びよび戻され、豊かな音の風景をつくりあげている。

しかし自然の音、失われた音のみを稀少価値のごとく称賛するつもりはない。コミュニケーションによってここに生まれる音風景を、聴きのがしてはならないだろう。2階建ての教室棟は、小さな庭をはさんで軒を並べ、それがさらに2列に向い合っている。各教室の向い合った面には、大きな出窓をもつ自由なスペースが張り出し、そこにはアイドルのポスターがのぞいていたり、風鈴が吊されていたり、生徒がお弁当を広げたり、窓に腰掛けおしゃべりをしたり——時にはおしゃべりは隣り、上下、そして向かいの棟との間にも交される。窓辺におかれたラジカセから流れる音楽。それぞれが思い思いの曲を持ってきてはかけるのだが、苦情はでないという。曲そのものを聴くというより、その行為を通じて共有の場に参加することが重要だからであろう。また音源を発している人の姿が見え、さらにその人をよく知り親しい場合、音は騒音として感じられる可能性は低いのである。教室棟の一角に立つ時、整然と一列に並べられた教室からは生まれることのない、大らかなコミュニケーションのうずの中に共振し合う、快活な音の波に包まれる。この一群の教室棟を中心に大工・工作室、音楽室、武道場、体育館など一つ一つの建



物が独立しながらも村のようにあたたかく寄り集まったこの空間には、風に乗り、建物の隙間をぬい、様々な音が行き交う。そこには互いの存在を認めつつ、自らの生を力強く肯定し得る音風景がある。

このように環境を耳で捉えること、また音を環境との関わりの中で考えることは、視覚優位の、また視覚と聴覚が分断された近代社会においては見過されてきた問題である。そもそも音風景＝Soundscapeという語は、カナダの作曲家R.M.シェーファーによってLandscapeから造語されたもので、音を音そのものだけでなく、それをとりまく場や人間から発想してゆく概念である。従って音風景をデザインすること、つまりサウンドスケープ・デザインとは、場のもつ特性や関与する人間を中心に捉えながら聴覚環境のデザインをすすめてゆく態度であり、この点において単なるサウンド・デザインとサウンドスケープ・デザインとは大きく異なる。おそらくアレグザンダーは、サウンドスケープ・デザインを意識的には行なっていないが、結果的にこの盈進学

庄野 泰子(しょうの たいこ)
1956年　青森県生れ　音楽学　サウンドスケープ・デザイン研究所所属　環境音楽の理論研究の傍ら、BGM、イメージサウンド等の制作をしていた中で、環境音楽の現場での問題に目を向け、その後、広く都市におけるサウンドスケープ・デザインの研究・実践を行っている。
著作に「波の記譜法—環境音楽とはなにか」(共著)がある。

Photo by Hiroya Kaji



園には活力に満ちた豊かな音風景がある。それは彼の設計プロセスが、実際に場を体験しながら、また場に関わる人々つまりユーザーをまき込みながら推し進められてきたからに違いない。

アレグザンダーがサウンドスケープ・デザインにおいて成功しているさらにもう一つの理由がある。それは空間の中に、日常を「異化」する契機を内含しているということである。例えば武道場の連続する小窓や多目的ホールのアーチ型の窓など、一つ一つ変化に豊んだ窓枠・窓桟を通して自分なりの風景を切り取る時、そこには見慣れた光景がふと鮮やかに立ち現れる。また規則性をもたない建物の配置は、捉える角度によってその貌(すがた)を見え隠れさせ、意外な風景を展開する。さらに、多目的ホールと特別教室にはさまれた通路を教室棟に向かって歩く時、それは懐かしい路地裏のようにひんやりと薄暗く、斜めに折れて行方は見えない。しかし教室棟からのざわめきは、はっきりと伝わってくる。教室は見えずその音だけがきこえてくる時、いつものしてしまえば生命を失う。心にとめられることもなく、ただ平坦に漫然と流れゆくだけである。しかし、鹿おどしの鋭い音がその流れを区切るとき、その前にその後に音風景が見事に息を吹き返す。仕掛けた音そのものを聴かせるというより、日常の中に埋没している音をその背後から蘇らせるのである。そして独特な視覚体験が、生き生きとした聴覚体験を生むように、ここには、その感性の逆の回路が成立する。この可能性を学園において具体化する案としては、風や水を利用した音響彫刻(サウンド・スカルプチュア)の設置や、学園自身のアイデンティティーを持つオリジナルなチャイムの制作などが考えられる。これらの音は、時には環境の中に融け込み、時には環境を生き生きと蘇らせ、いま在る学園の豊かな音風景に永遠の生命を与えるであろう。

生活の場が日常の枠から一歩ぬけ出たところで体験されるだろう。あるいは、流麗な梁に支えられた高い吹きぬけの多目的ホール、そこに設置されたアルコーブは、腰掛ける場であると同時に、音を聴く場でもある。耳慣れた音に遠くあたたかく包まれる場であり、時にはその中に季節を感じたり、新たな発見をしたり、様々な音と出合う場なのだ。このように構造上、視覚上引き出される独特な空間体験が、聴覚体験にも生気を吹き込んでいる。アレグザンダーの『パタン・ランゲージ』をめくると、音に関する提言がいくつかみられる。壁や距離や建物によって騒音から守られた静かな「奥」を町の中に用意すること、といった騒音調整や消音化をめざすものだけでなく、例えばプロムナード沿いや広場などに小高い演奏台を設け、そこで繰り広げられる辻音楽師(ストリート・ミュージシャン)の音楽や人々の踊りで都市を活性化すること、また建物のドアは閉めると音を遮り、快適な「コトン」という開閉音を発するようにすることなどが示唆されている。音をすべてうるさいもの、消すべきものとしてネガティヴに捉えるのではなく、よりポジティヴに生活の中にからめとってゆこうとする態度は、まさにサウンドスケープ・デザインの思想と同一である。現在のところ、アレグザンダーの場合は潜在的なものに留まっているが、今後聴覚的な視点が意識的に組み込まれたなら、どんな音風景が展開されるであろうか。

最後に、サウンドスケープ・デザインのもう一つの可能性を示しておこう。それは新しく何らかの音を「仕掛ける」ことにより、日常の中に亀裂を入れ、活性化する試みである。この聴覚的な試みは恰度、前述の変化に富んだ窓枠や窓桟に相通じる。アレグザンダーは『パタン・ランゲージ』の中で、窓ごしの眺望や事物との触れ合いは、窓がそれらをどのように枠取りして見せてくれるかに左右されるのであり、例えば単純な風景も6枚のガラスで小割りにすれば、それぞれの眺望が生き生きとしてくると指摘している。このことは、聴覚においても全くパラレルな問題なのである。例えば、日本古来の鹿おどしを思い浮かべてみよう。庭園に時折響く鳥の声、水のせせらぎ、木々の葉擦れの音、そして静寂……これらがいかに美しくとも、それが一旦日常化

宇佐美圭司

「何に似ているか、」というアレグザンダーの嫌いな問いかけ

去年の暮に描きあげた絵に、『脳――移動サーカス小屋のような』という変なタイトルをつけた。上下2層にわかれた構図で、上下の形がお互いに相補い、関係しあい、その痕跡が複雑な迷路状を呈する絵である。

私は、脳や移動サーカス小屋を描いたのではなく、それらのイメージを描いたわけでもない。ここ十年くらい描き続けている円形のなかの4人の人型の組織を、上下2層構造にして展開したのである。私の絵は何かものやもののイメージを描いたのではないから、何が描かれているのかを探索しても徒労に終ることが多い。何が描かれたかを言いあてるのをあきらめると、こんどはそれが総体として何に似ているかと人は考えはじめる。他人ばかりではない。時には作者の私までがそう考えはじめるのである。

この絵を描いているとき、私はなんとなく自分の脳の働きを摸写する気分になっていた。それでタイトルを『脳』にしようかと思っていたのである。しかし完成まじかに、それがふと移動サーカスのテント小屋に似ているなと感じたことがあった。それ以後、私の脳のどこかに移動サーカスの仮設テントの小屋が住みつき、離れなくなってしまい、タイトルを『脳――移動サーカス小屋のような』とする以外になくなったのである。

鉄パイプのポール、テンションをつくるロープ、天幕のシート、大道具小道具を吊すためのサブロープ。サーカスの小屋は細部の形に到るまで力がバランスを保ちながら緊張しており、曖昧な延長を感じさせない。今年の春、インド各地を旅行した際、私は2ケ所で、そんな天幕を張ったサーカスに再会した。一つはインド最南端、ケララ州の港町コーチンで。もう一つは西インド、ラジャスタン州のジャイプールという街で。天幕の前で、そして小屋に久しぶりに入って(子供の時以来かな!)私は自分の『脳』の絵を思いだした。サーカス小屋は移動性のある建造物である。それらは移動のたびに折りたたまれトラックにつまれて運ばれる。それ故にものや形は折りたたむことの制約のなかで生まれており、ロープや支柱、テントの層等の複雑な交錯にもかかわらず、全体の形は、明解な統一感を持っている。

折りたたみ式というところが私の絵と共通しているかもしれない、と私は自分の『脳』の作品を思いだしながら、そんなことにはじめて気づいたのだった。

何に似ているだろうか、と問うてみることは、たとえそれ自身とは無関係でも、



宇佐美圭司(うさみ けいじ)
1940年　大阪生れ　画家　多摩美術大学助教授　1972年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表
1980～81年「100枚のドローイング」展
1984年「グラデーション・時の回廊」展　開催
著作に「絵画論」「線の肖像」「記号から形態へ」「デュシャン」その他がある。

まったく無駄だと言うわけではあるまい。類似の連鎖は空間をつくり、人はその空間のなかで考えはじめ、感じはじめるのである。私はアレグザンダーの建築があえて何に似ているかを問うてみて、サーカス小屋のことを言いだしたのである。しかしイメージの連鎖の輪はサーカス小屋と盈進学園の建物とを直接結ぶと言うわけではない。

私はジャイプールで、曖昧な延長を感じさせない、もう一つの建造物と出会った。ジャンタール・マンタールと呼ばれる天体観測所である。詳細は雑誌「みづゑ」夏の号に書いたけれど、その中心的建造物は、直径が40m余りもある巨大な半円形の日時計である。サーカス小屋が移動性によって制約されているとすれば、ジャンタール・マンタールは天球上を運行する太陽の運動、その光や、位置に制約されている。太陽の日周運動は真北に向かって軸線を取れば反射状(左右対称)の形として表れるだろうし、その光は子供の絵の太陽の表現にあるように中心からの放射状をしたルーレットの形をとるだろう。実際、半円形日時計は真北に向かって、ジャイプールの緯度に等しい傾斜角でせり上る。それは30m近い高さの階段のついた三角形構造物となって両翼¼円の大理石の文字版に影を落とす。

私はそこで延長としての巨大さではなく、曖昧な延長の一切をそぎ落とした抽象的な形に強い感銘を受けた。何かを連想せよといえば、私は躊躇なく原広司の自邸をあげるだろう。そしていくつものそのような建造物が建ち並ぶジャンタール・マンタールの全体は盈進学園を思わす。

脳、サーカスのテント小屋、ジャンタール・マンタール、原広司自邸、アレグザンダーの盈進学園という類似による連想が、盈進学園の建築の性格の一端を物語っているだろう。

ジャンタール・マンタールが巨大なのは、観測精度を上げるためであった。学校が巨大な姿で岡の上にそびえるのは、そこに多くの学生がつどうからであろう。もちろんアレグザンダーはどのようにつどうのかを考え、それに形を与えたのである。しかしいかなるつどい方が正解であるかを誰がいい当てられるだろうか。私は学校を語るのではなく、建造物の形が、なんらかの理念の制約下にあり、曖昧な延長を持たない、といった造形上の感想をのべるにとどめたい。





Photo by Hiroya Kaji(2点とも)

小林洋子

思いっきり遊んじゃえ!

三鷹にあったあの学校……。建築的なねらいとしては、光を沢山取り入れた学校ということで、とにかく窓が多かった。たしかに明るいことは明るかったんですが、そのおかげで教室自体にはほとんど壁がないし、それどころかトイレまで光が多くはいる場所なので、まる見えで、おちついて用をたすこともできないという不思議なつくりの学校でした。

突然ですが、私、大東文化大学盈進高校の卒業生なんです。今は移転して盈進学園東野高校になってますが、まあOBみたいなもんです。

卒業して、三鷹の学校が廃校になるという噂がたち、自分の母校がなくなってしまうというなんとも不思議で、さびしい思いをしましたが、その噂は正確ではなかったようです。ただ学校が移るだけだったんですね。

ちょうど一年位前に、学校が移転して今度新しく演劇部ができたので講師に一日だけ来てくれないか、というお話があって、行ったことがあるんです。あの時はびっくりしました。びっくりしたというより、アングリした、と言った方が正確でしょうか。まず、石畳をわたって正門をくぐると……。と、こんな具合に簡単にはすませられない! この正門からして変わってるんです。普通の学校だったら、わりとシッソに桜並木に創立者の銅像って感じでしょう? なんとなく正門をくぐると神聖な気持ちになって、勉強の一つでもやってみようかっ、て気になるもんですよね。ところがこの学校になると、和洋折衷のカキワリのような凱旋門をくぐるとそこに撮映所がありましたっ、て感じなんです。まず校舎というものは、教室も職員室も特別教室も一つの建物の中にはいっているというのが一般的だと思うんですが、ここはそれ等が全部バラバラに建っていて、しかも教室なんてのは、さらに細かく、一つの校舎に2クラスしかない。職員室は、いかにも田舎の分校を意識した木造平家の外に廊下のついた建物。そこにはチャボなんかがホイホイ歩いている。講堂にはシャンデリアがあるは、校舎の廻りにはお堀はあるは、とてもここで勉強するなんて思えない。一日中遊びたくなってしまいそうな所でした。どうせやるならあのお堀、夏には流れるプールにでもしたらどうでしょう。あの講堂も、せっかくシャンデリアがあるんだから、音楽鑑賞には本場のオペラをぜひ呼んでほしいものです。ついでに舞踏会など文化祭で催してほしいし、アヒルや犬やチャボ達の世話クラブなんかつくって、そのうち馬も飼って、乗馬クラブをつくる、なんてのはどうでしょう。と、まあいろいろと、勉強どころじゃない、遊びたくなってしまう学校です。これは埼玉にしかつくれないというのもよくわかります。生徒にしても、つっぱろうにも、つっぱりようがない! なんせ廻りは畑ばっかりで、喫茶店を捜すのも一苦労、人間さえチラホラとしかいないような場所で、どんなにつっぱったところで、誰も見てくれる人がいないんですから、それはさぞ、むなしいことでしょう。これはやっぱり、ひらきなおって学校内で遊ぶしかない!? となるわけです。

私だけの感じかもしれないけど、たしかに校舎もずいぶん変わりましたが、なによりも感じた事は、先生方の顔が変わったことです。三鷹もあんまり都会とは言えませんが、それにしてもあの頃の先生方の顔は都会特有の顔してたんだと思います。シャベルで土を掘ってつつじを植えかえている先生や、チャボや犬の世話をしている先生を見ると、ずいぶん、おだやかないい顔になった、やっぱりこの学校に移ってよかったのかもしれないと思う次第です。話しは変わりますが、〝青い鳥〟の場合、一つの芝居を創って行く時、まず自分は今回、長ゼリフをやってみたいとか、この曲をプロローグで使ってはどうか……etc。と、とにかくそれぞれのメンバーが自分のやってみたい事を出し合って、それからみんなで組み立てて行くんです。あの校舎をつくる時も、学校にお堀があったら面白いとか、こんな講堂があったらすごいといった、先生方の意見が取り入れられて、それが現実化していったそうですね。そこでまた唐突なんですが、三鷹の学校にいた時に、生徒が軽く言った「演劇をやりたい」「ことわざを知りたい」という一言が、次の年には「個性学習」——注意:個性学習とは(当時は)全学年が100種類以上の授業の中から各自好きな科目を3つ選び、1年間履修すると単位が取れるというものである。——の一つとして組みこまれていたことがあるんです。そんな学校ってないでしょ、本当に。そこを大切にしてほしいんです。いずれにしても、型にはまったものではなく、演出も、脚本も、役者も、スタッフも、みんなが、すべてに関わって、一つのものを創り上げる醍醐味は、他のものにはわかるまい、などと密かに自負しているのです。





Photo by Tsutomu Sakamoto

小林洋子(こばやしようこ)
1962年　長野県生れ　役者　劇団〝青い鳥〟所属　ユニークな集団による自己組織的な創作を行う女性のみの劇団〝青い鳥〟で、市堂令(いちどう れい)の一員として数々の作品を作・演出し、また「一日の楽天」「いつかみた夏の思い出」などの作品に役者として出演した。









Photo by Hiroshi Kobayashi (4点とも)

長谷川逸子

自然と人工、建築と理論

西武線の電車の中で眠気に取りつかれたまま入間市駅に降りたのだが、駅前広場も何とものんびりしたものだったからか、いっこうに眠気が引かないままタクシーに乗り込む。しかし次第に前々から見たくていたものがようやく見れる。『新建築』に松葉一清氏が「昂揚させる空間がある。」「そこに立った時、気分が昂ぶってとめどもなくなる。そんな感じがある。」と書かれたものを思い出し、期待をふくらませた頃、第一の門についた。正門の前に早くついた私のアトリエのスタッフが2人、座り込み待ちかまえていた。入間市って空気のせいか何やら眠くてこまっている、とそろってだらけている。2人にはっぱをかけて入っていった。だいたい建築雑誌に出ている学校建築は生徒達でうまっているものだが、この学校の写真で人が多勢いるのを見たことがない。日曜日のこの学校は、その写真といっしょだった。現地に立てば多分生徒達の声でざわめいている時の様子くらい、自分で想定できようと思い込んで来たのだが当たらなかった。歩き廻りながら、静寂な芝居の書割の前に立つような気分や建築模型を拡大したような乾いた空間に立つような感じがした。

茶畑の向うに、ひとつずつさまざまな立面を持つ建物が集落のように配置されているその風景画のような写真を見た時には、非常にノスタルジックなるものを感じ、まだ農業が残るこの関東平野のひとつのまちにぴったり入り込んでいると思った。アレグザンダーは自然都市という多様体をSemi latticeと呼ぶ複雑で数学的な構造に還元できるという理論を考えた。その理論は建築以外に思想の分野でも大いに取り上げられ注目をあびてきた。その理論家が考えた実物建築ということで、自然的なるものを思考によって知的建築としてつくり上げようとすることに、私だけでなく多くの人達の期待が向けられた。しかし、写真で見た印象とは全く違い、茶畑の向うに出て、直に自分の目で確認したその風景は、眠気を誘うほどののんびりした空気の漂う入間市の郊外にあっては、自然さというものとはほど遠い人工的建築物としか読みとれなかった。

私がこのごろの建築で自然のイメージを建築化しているのは、建築的・高技術的な細部による自然と宇宙の描写であり、また同時に自然的・宇宙的細部による建築の描写であり、それはかつての農耕社会にあった自然に対する敬虔なる気持、自由な世界観に、現代という工業社会を生きる我々の糧とするものを感じ、そのバランスのとれた豊かなる共生の場所づくりを考えたいという表明だ。今設計中の湘南台文化センターにあってもく地形としての建築>と題して「台地や林、森、山々が連らなった豊かな野、波や雲、海や空を感じ、多分訪れる人々の前に自然のアナロジカルな記号群となって呼びかけるものになり、そしてこの地に新しい自然環境として土着化してゆくことになる」と考えてきた。私は今日的自然というものを追求しているのだが、この学校の建物は私のイメージするものとはまったく違いすぎた。

そこで私はもし東京のような、まさに彼が批判する近代建築の建ち並ぶ人工都市にこの盈進学園が建ったなら、その自然体としての建築を見ることができたのだろうかと考えてみた。東京にはかつてあった自然さなんて、もはやないというとらえ方もあるが、しかしこの都市は世界にまれに見る重層構造を生成しており、アレグザンダーのセミラチスという集合論的なる構造をしのぐほどの多様なる構造を持ち、アジア的・自然都市的な構造を残している。現代的なるもうひとつの新しい自然を私はそれに感じている。もしこうした都市に建ったなら、ノスタルジックなひとつの特色ある区域が出来て、全体との対比の中で興味深い効力を見せてくれたのではないだろうか。そして多分、多様なるもの自然なるものを目ざす論理でつくられたこの建築が、実は現実都市の中では都市という多様性と対比する単一的なるものとして映し出されるようにさえ思えた。柄谷行人が<隠喩としての建築>の中で、アレグザンダーは「より人間的で生きられる都市空間を作ろうとする他の多くのプランナーたちと、一つの点において決定的に違っている。……多様なるものをめざしているかにみえて、それに対する根本的な敵意がある。」と書いている。柄谷のこの言葉がもつ空間が、もし都市にこの建物を建てたならみえたのではないかと考える。

もうひとつ、現在私ははじめての公共建築をつくる機会を得て設計作業中だが、建築そのもののあり様だけでなく、アレグザンダーがここで問題にしたようなこと、建築家とユーザーの対話、建築家と施工法、現代建築と風土や素材、などは私にあっても問題であり、対面している。しかし日本でしか仕事をしていないからか、自分とはその結論がずいぶん違うと考えさせられた。私はずっと厳しい小住宅をやってきた。単なる経験や既成観念を超えて生きざまをぶつけあうクライアントとの対話。また個人的興味を超えてCollective Mentality(社会主観)ともいえるものも捉えてゆかなければ出来あがらない社会との関係。住宅という、見る建築ではなく使い生活する建築—つまり人が生きてゆく場所のあり方やそのつくり方—の延長線上において、どのような規模の建築であっても考えてゆきたいとする私の姿勢からすると、この建築はあまりにも単純で乾ききって見えてしまう。しかし私はあくまでも建築の論理化をめざす学者としてのアレグザンダーの姿勢には変わらず尊敬してやまないものがある。

長谷川逸子(はせがわ いつこ)
1941年　静岡県生れ　建築家　菊竹清訓建築設計事務所、東京工業大学篠原研究室を経て、1978年長谷川逸子建築計画工房設立　主な作品に焼津の住宅を代表とする一連の小住宅、AONOビル、眉山ホールその他がある。



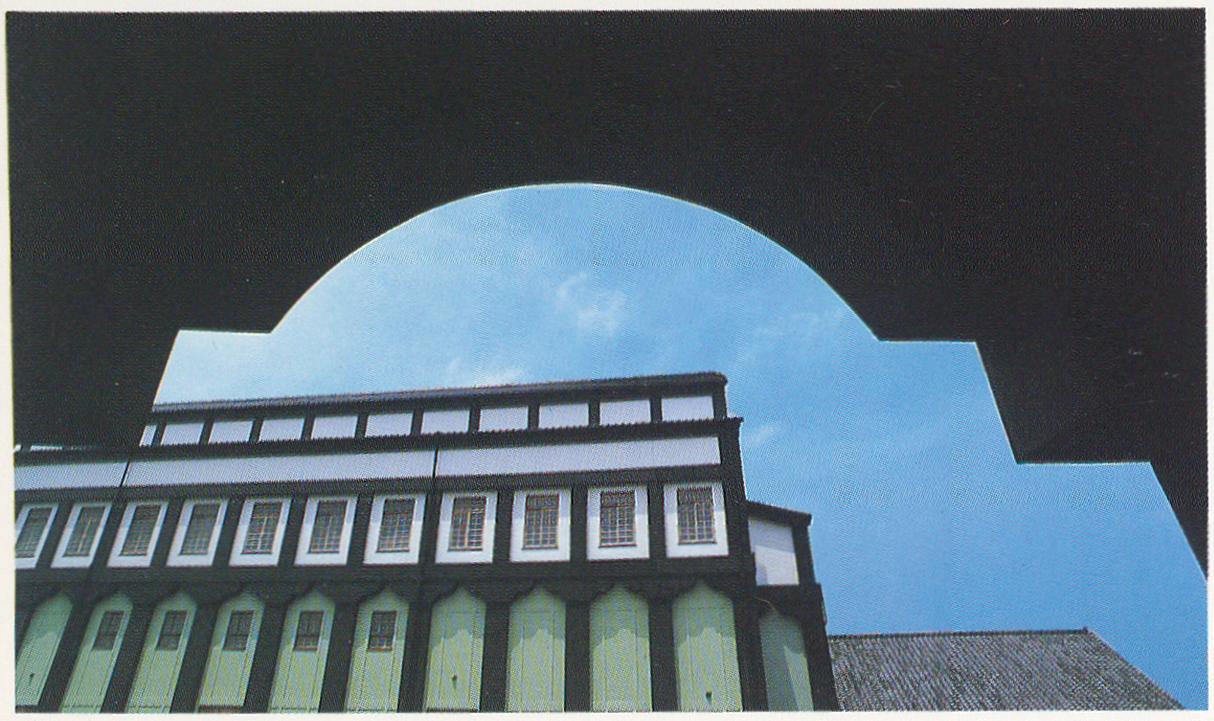


Photo by Hiroshi Kobayashi(上下とも)

富田玲子

長い旅路の果てに

5月10日からの長い旅の終りに、今日7月1日、私は日本埼玉県入間市の盈進学園にたどりついた。カナダバンフ国立公園の美しい町バンフから始まり、バンクーバー、シアトル、タコマ、ポートランド、レッドウッド国立公園、オーリック、ヨセミテ公園、デスバレイ、ラスベガス、ロスアンジェルス、サンタモニカ、サンディエゴ、メキシコのティファナ、ロスアンジェルス、サンフランシスコ、ホノルル、新宿、東中野、八王子、渋谷、バンコック、チェンマイ、チェンライ、アカ族の村、ヤオ族の村、大手町、横浜を歩きまわり、町を見、森の空気を吸い、海や川にふれ、人々と話し、いろいろなものを食べ、毎日がくるくるまわり、血のさわぎもおさまらないままに、今日また新しくできたばかりのまちを見ることになった。今日はどんな町が見られるのだろうか、という期待で目をさます毎日。

・バンクーバーとシアトル——木や鉄の古い倉庫が改造されて、ミュージアム、アトリエ、レストラン、おもちゃ屋、劇場、保育園、公民館となって生気をとり戻し、水際が蘇る。

・ラスベガス——砂漠の真中に、ある日突然出来上ったまぼろしの町、歴史や地域性のなさ故にアメリカ中の老若男女が集り、楽しみ、くつろぐ、底ぬけに明かるいまち。

・ロスアンジェルス——西海岸の陽気さ軽さを代表する楽しいまち、木もれ陽がきらめく森の様な、大きな大きな木造の骨組でできているマッドマウンテンのジェットコースターを見れば、誰だってど肝をぬかれアメリカ＝グレイトと思うにちがいない。

・サンフランシスコ——有名な霧のゴールデンゲイトブリッジ、急な坂道を走る電車、花でうずまる坂道、町並にリズムをつくるベイウィンドウは歌に歌われるだけのことはあるというもの。

・オーリック——あるのは小さな酒場、小さな学校、小さなホテル、西部劇の町。

・ティファナ——国がかわるという大変なできごと、騒音、お祭りさわぎ、スペイン語、黒髪、緑はへり、物価も⅓に。

・新宿——光りかがやく超高層ビルディングの足元に動めく、グレイの背広、眼がね、猫背、黄色い肌、つやのない黒髪。

・バンコック——雄大なメナム川、町の人々の生活を支える水路、どこに行ってもおいしい食物、黄衣をつけてつやっぽい僧侶達、風にやさしく鳴るワットアルンの無数の鈴。

・アカ族の村——20棟ぐらいの草屋根・高床の家、きらきらする子供達の目、アヘンでうっとりしてしまった大人達の目、朝早くから床下でブヒブヒさわぐぶた達。

そして今日は入間の駅に降り立つ。同行者はイナックスギャラリーの入沢さん。テキサス大学生マンディ、ペンシルヴァニア大卒のダグ。タクシーが降ろしてくれたのは不思議な不思議な町、ここはどこなのだろう。日本の様な気もするが、どうも北方の国の町の様だ。静かな、乾いた、固い、そしていく分の淋しささえ感じさせる町だ。緑が少ない。点在する家々の壁や窓は、画然と内と外を区切り、外を歩く我々には、家の中の活気が伝わって来ない。路地や回廊の形と空間は素敵なのだけれど、内側の生活がはみ出しているという様子がないのだ。窓や入口にひさしがないので今日の様な雨の日はなおのことなのだろう。



Photo by Hiroshi Kobayashi

富田玲子(とみたれいこ)
1938年　東京生れ　建築家　象設計集団　主な作品に、
牧山邸、ドーモアラベスカ、進修館、宮代町立笠原小学校、
その他多数がある。

町の活気というのはどこから生まれてくるのか。多分それは一朝一夕にしてできるものではないだろう。とはいうもののそれを計画して作る場合のためにいくつかのコンセプトが提案されており、アレグザンダー氏も「建物の内と外に中間の領域をつくること」あるいは「建物の一部を町に参加させること」つまり、「内と外の生き生きした関係」をつくることを強調し具体的手法まで示しておられ、私達はそれに大いに共鳴しているのだが、この学園でそれをどう実現されたのか、実は疑問に思っているのである。一般教室群の回廊は、そこに内の生活がはみ出しているとは言えない通路であるし、反対側の木造のギャラリーと呼ばれるスペースは内に居ると、とても心地よい場所なのだけれど、多分窓の高さ、ひさしのなさなどの関係で、外を行く人達と関係がないという感じだ。固く扉を閉じた講堂はどこから入って良いのかわからないし、食堂の前に少しばかりのひさしでおおわれたテラスがあったらどんなに楽しい食事風景が見られただろうと思ったりしてしまう。彼の言う6フィートの深さのポーチとか、バルコニーとか、建物の各階にめぐらすギャラリー、アーケード、ニッチというのはどこにあるのだろう。美術、音楽、理科などの特別教室は、町に参加するワークショップ群として、あるいは店先の様に作れなかっただろうか。自分達で計画する場合には大変むずかしいテーマなのだけれど、彼の書物を読んで感激していただけに、注文が出て来てしまう。

でも注文だけでなくすばらしいと思ったことも言わなければもちろん片手落ちだ。多目的ホールのあのふしぎな魅力、大講堂内部のめちゃくちゃなおかしさ、食堂のブース(我々は駅前でお弁当を買ってここで生徒達と一緒にピクニックをしたのだ)建物をおおういろいろな材料の組合せ、一般教室が1棟づつ独立していることと、2階の教室に直接登る外階段があること(私達が宮代町の小学校の設計途中で断念したのは残念!!)、寺の参道の様な第一の門と正門の間の細長い空間など。

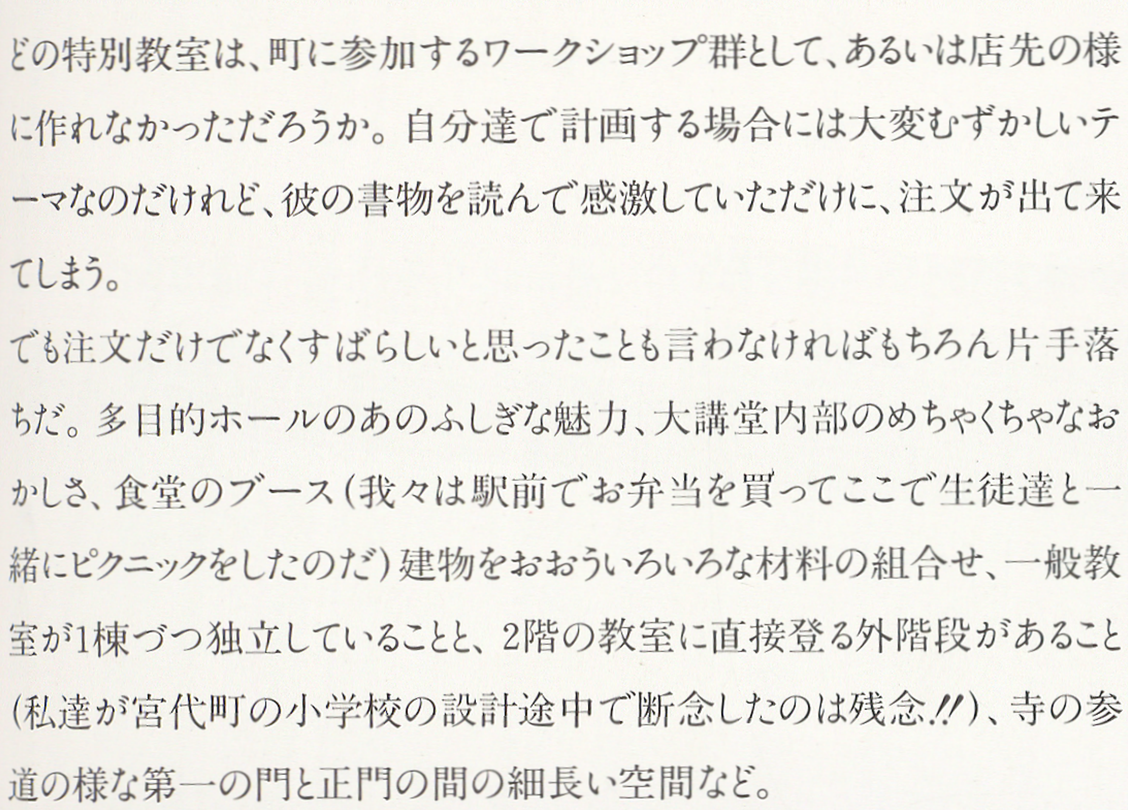


Photo by Tsutomu Sakamoto

それにしても「学校はまち」という合言葉で、アレグザンダー、アルドロッシ、アトリエゾウ、アルド・ファン・アイク(孤児院)、アンス・シャルウン(Hを読まないとする)の5つのAが学校の設計をし、それぞれ当然のことながら、ことなったまちをつくっているのは、おもしろいことだ。

でも、本当は、同じ年令層の子供達が集まって同じ様な集団に分けられて、同じ様な生活をする場をまちと呼ぶことに無理があるのかもしれない。



Photo by Hiroshi Kobayashi

野田俊太郎

“DIRE STRAIGHTSを聴きながら…”

近隣小学校の旧校舎——木造

茶畑越しの遠景

横田へLandingする戦闘色のF4E Phantom

オランダ村——なぜかこの言葉が頭をよぎる

砂利のペーブを避け側溝の蓋の上を歩いている自分に気付く

とても歩きにくい事を体が知っている?

Fケーブルの露出配線

やはり歩道平板なのか

白壁に残る足跡

庇のないエントランス

敷居を踏むと足が腐るという言い伝えを君は知っていた?

高台から見渡す全く標準的な街並

摘み取られずに新芽の残された茶畑

白壁に残るドッヂボールの水玉文様——共生の発芽

簀の子の使われ方を予期していたのだろうか

なぜ池なの

不思議な空間体験

〝この学校はTVにも出たすごいおうちなんだからねぇママ〟

父母会に伴われた通り過がりの幼児・特有のパフォーマンス

私を部外者と気付いたのだろうか



2年1組の軒に下がる風鈴の音

たこさし大好き!今も残る相々傘

学生服の背景になった建物はstoickに見え、色取り彩りのドレスと

小物を下げた母親達が情景に加わるとディズニーランドを想わせる

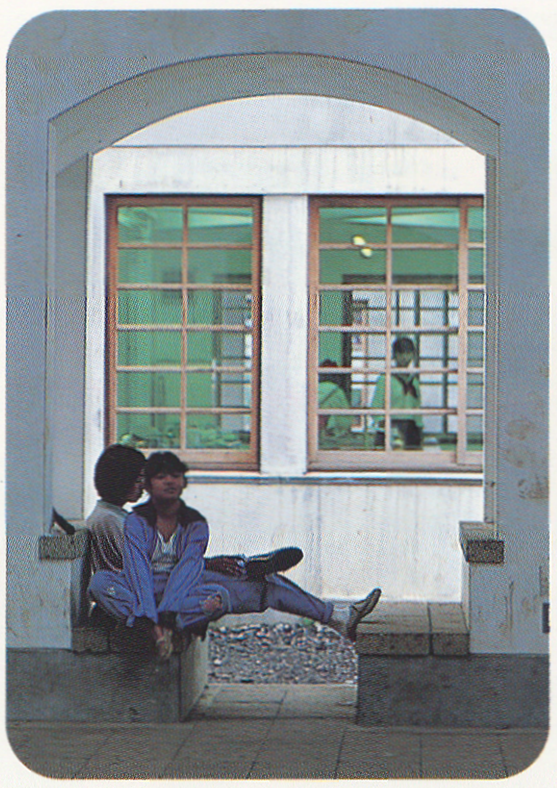
ボート遊びに興じる男生徒のカップルと、人気の無くなった食堂のアルコーブで

語らうカップルには何の違いもない

建築家とは不思議な職業ではある

道路端のブロック屏にみとめられる透かし彫り意匠の多様性

——不思議と異邦人には目につくものである





反りのある瓦屋根を載せた正面はとてもキュートだ

軒下を埋める派手な市松文様——〝CHESS MOVES〟に流れるマリーヘッドの曲

講堂は異様な姿である

その柱のモチーフが斗栱からきたものであると気付くまでに小1時間経っていた

窓越しに見る切り取られた立面は、えもいわれぬ曖昧さを漂わす

なぜかレバーハンドル。誰が選んだのだろう

アルコーブで飯事(ままごと)遊びに興じる若い恋人関係

いったい掃除は誰がやっているのだろう

旧校舎から運ばれたであろう古い下駄箱。その支えにあてがわれた木端

やはりここにもグレーの業務用ロッカーが必要に迫られ置かれている、見慣れた風景

ラウンヂへの回廊はあまり使われていない

木床の艶が違うのでそれと分かる

画鋲で掲示が出来ることが既に珍しくなっている

やはりトイレは壊わされ始めているのだけれども

今まで見えていなかったアイドル歌手のポスターが顔を出す教室のサロン

Yuki Saito、Miyuki Sugiura、おニャン子・クラブ

今は亡き岡田有希子



何かを読み取ろうとして訪れた私たちが得た印象は既に、受け取ったものではなく捥ぎ取ったものだから……

Photo by Hiroshi Kobayashi(上・下)、Hiroya Kaji(中)。

野田俊太郎(のだしゅんたろう)
1951年　東京生れ　建築家　建築環境計画共宰　1982年、紫野の会かりいほ施設、に対して家協会新人賞を受ける。
その他の作品にコサカ社屋等がある。
また現在インドネシアにて、異国文化風土に対する処し方を実際のプロジェクトを通して摸索中である。

兎に角、素朴な印象を述べるのがとても憚られる建築です。多くの実験を経て充分に確立された方法論に、異論を挿む余地などあろうはずもありません。かつて彼の理論を研究する同人会の一員として、戦後ヤミ市の魅力的な現況を何とかPattern化しようと躍起になり挫折した経歴のある私にとって、ことさらそう思えるのかもしれません。空に浮ぶ雲の内部では、気流の乱れがある、と感じていた我々が、乱気流の表徴として積乱雲の姿を観るまでには、永い時間が必要でした。それと同じ様に、この建築の生まれた背景に人々の眼が向けられるまでもう少し時がかかるとしても、私の懐いた素朴な印象について、私自身想いをめぐらす事が求められるでしょう。
異邦人が彼の地に赴き、その地で起こりつつある状況を理解できる様になるまで、常にある時間の経過を要するものです。まずはじめは、特異な物、或は自国で体験したことのない真新しいものやことが視界の中で氾濫する状況。この時点では、ものの理りはすべて自分をベースに行なわれているものの、それと同時に、新しく体験された情景をカテゴライズし権利づけの行なわれる、非常に不安定な状況でもあります。未だ結論づけられないままに情景の断片が浮遊しているこの状態を、出来るだけ長く持続させる様に、意識的に努力すること。美しいものを肥やすまがまがしいものを、その不気味な不透明さのまま封じ込めた世界がアジアなのだから。しかし校内を巡って得た印象は、なぜかF.P.Schubertの音曲を耳にしている時の安堵感にも似て、視野に入る情景がどの様に変転しても、必ず戻ってゆく基本の調律を懐孕した空間の体験だった事が気掛りでなりません。明るく陽光の射す中央広場と水辺、そしてそれを取り囲む建物の立面にproportionalに切り込まれた開口。適度な傾斜と曲折を有するアーケードは、折しも午後の強い陽射しを受け、陰影のリズミカルな模様が美しく、記憶を辿ると、紛れもなく欧米の歴史的街並が持つオーダーと重なり合い、少しの違和感もなく甦ってきます。日本に建つからといって、ジャポニカである必要は毛頭ありませんし、私もその様な印象をこの建物から感じた記憶はありません。しかし彼の理論の応用を、〈よい環境の構造〉についての一提案としてではなく、よいという言葉が懐孕していた形式に馴染むことなく消滅していった、微弱な粒子を拾い集める手段として私は期待していた様に思います。パタン・ランゲージという新しいプロジェクト言語が、アジアのdialectとなるまで作業が続けられることを切に願っています。
松葉一清の詳細な〝気分昂揚〟の在り様を読むにつけ、私が感じたstraightでstaticな佇まいの印象が際だってきます。熱帯特有の強い陽射しの下、椰子の樹陰で想いを巡らしているので、殊更にそう感じるのかも知れません。そして、転調に転調を重ね行く方が知れないDIRE STRAITSの雑音に旋律を聴きながら。



Photo by Hiroshi Kobayashi

井上章一

しろうとのしろうとの出会い

狭山小学校ぞいの道をとおって訪れると、まず大講堂の姿が目にはいる。イタリア中世の教会をほうふつとさせるその光景は、訪問者に軽いショックをあたえる。幻想的とでもいうのだろうか。どうやら、これから訪れるところは、とおりいっぺんの場所ではないらしい。ずいぶん異様な空間ではあるようだ。そうした期待をいだかせる。

訪問者は、塀にそって第一の門へ行く。そこからは第二の門ともいうべき正門が見わたせる。そして、門のむこうに校内がかいま見える。ドラマの序幕とでもいうべきか。これからうかがえるだろうドラマをきわだたせる、テクニックだなと思う。

序幕をへて門をくぐったものは、眼前にあらわれた校内の景観にうたれる。そこは先にいくほどひろがっていく台形の広場である。この広場は、大講堂や管理棟にかこまれている。そして、広場のむこうには池がある。ちょっと、ヴェネツィアのドゥカーレ広場をおもわせる。

池のそのまたむこうは、小高い丘になっている。そして、その上には、赤と白のモザイクでいろどられた建物(じつは食堂)がある。台形広場のひろがりにさそわれた視線は、池をこえて丘の上の建物にとめられる。第一の門から正門をとおってこの丘にいたるまで、空間構成におけるドラマツルギーが、演出されているわけだ。

このドラマ、なかなか感動的ではある。だが、いささか安易なステレオタイプ化されたそれだなという感はいなめない。西部劇や時代劇、あるいはそれらのパターンを下敷にしたSF映画のようでもある。ちょっと安手のドラマ＝空間づくりと言えば言いすぎか。もっとも、紋切型で構成されているので、安心して感銘をうけられるのもたしかではある。

さて、SF映画では、しばしば異星人の集落などが舞台につかわれる。そして、こうした集落空間の造形にあたっては、じっさいに地球上に存在する集落のいくつかが参照されることとなる。諸集落の現実のデザインを解体する。そして、バラバラにされた部分をてきとうに選択してかきあつめる。こうして構成された空想の集落は、どこかで観客たちの記憶にうったえかけることとなる。さきほどは、広場を中心にした空間構成をSF映画のステレオタイプになぞらえた。じつは、同じことはこの学園の建築デザインにもあてはまる。じじつ、建物の意匠は、歴史のなかで我々の脳裏にやきつけられているさまざまな形をくみあわせてつくられている。江戸の倉、なまこ壁、屋敷塀と門、いかにも



Photo by Hiroya Kaji



井上 章一(いのうえ しょういち)
1955年　京都生れ　建築史・意匠論　京都大学人文科学研究所助手　和洋折衷の研究を行う中で書かれた著書「霊柩車の誕生」では意匠の生成とその社会史的意味を探り、近作「つくられた桂離宮神話」では、意匠を巡る言説を読解し日本美の再検討を行い、神話作用の形成過程を白日の下に曝した。

田舎風の反り橋、イタリアの中世都市、教会、列柱のアーケード、等々である。もちろん、本式の倉などがそのまま借用されているわけではない。倉らしいデザインがつかわれているにとどまる。悪く言えば、まがいものといった印象もなくはない。とくに、日本人の目で見れば、ほんらいは倉の腰をいろどるべきなまこ壁が上部にあしらわれているところなど、ちょっとあきれてしまう。池にかかる橋なども、どうかと思わざるをえない。悪口ついでにあえて言ってしまえば、フジヤマ・ゲイシャ風を好む外人の日本趣味が感じられる。擬和風建築といったところだろうか。

とはいえ、この学園には見るべきところがないなどというわけではない。空間構成など、いかにも演出しましたという臭さがなくはないのだが、じゅうぶん楽しめる。建築の意匠も、ひとことで言ってキッチュなのだが、それなりの活気がある。SF映画の比喩でいえば、それこそスター・ウォーズ的な面白さが味わえるのである。

おそらく、建築家たちのプロ意識からすれば、この学園はゲテモノであろう。なるほど、近年はポスト・モダンのかけごえとともに、デザイン上の整合性をくずす建築もふえてはきた。破調や歪曲を演出したもの、さらに、わざとアグリネスをはさみこんだものもある。空間構成でも、バロック的な作為が注目されてはいる。だが、そうしたものも多くは、破調による逆説的な正調をねらっている。その点で、意図されたヘタウマのようなこざかしさを感じてしまう。しかし、この学園にはそういったさかしらはない。しろうとくささとヘタさが、まさに正々堂々とおさまっている。そして、この雄々しさは、訪問者をじゅうぶんに納得させる。じっさい、私などここしばらく建築鑑賞によってこれほど感銘をうけたことはない。友人たちにも、自信をもって、一見の価値があるところだと断言できると思った。

プロの建築家たちには、こうした表現はのぞめない。そして、多くの公共建築は、彼らプロによってたてられる。だとすれば、この学園のもつ新鮮さも、アマチュアという例外ゆえの異化効果にあるのだろう。みんながみんなこの学園のような設計をはじめれば、やはりプロ的な洗練のほうがたっとばれると思う。もっとも、こんなところに感銘をうけるのも私がしろうとだからかもしれないのだが。

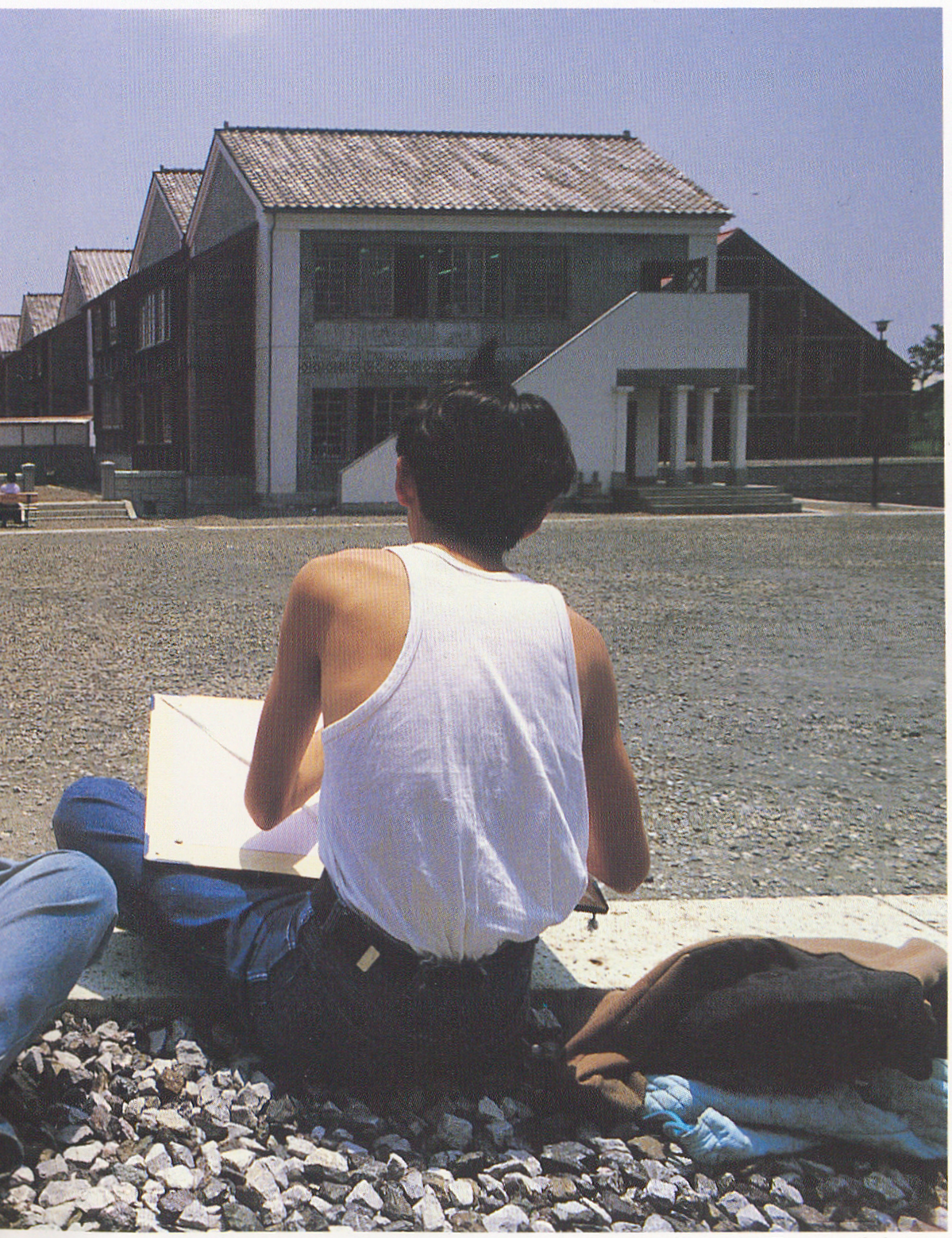


Photo by Tsutomu Sakamoto



Photo by Hiroshi Kobayashi

盈進学園東野高校生徒雑談会

僕らの学校変格活用

●盈進学園、ここは江戸か明治か外国か。

小沢 この学校ってね、日本古来の建物って感じで、歴史というか、そういうのがある感じがする。……鉄筋のビルじゃなくて、近代的じゃないというようなね。

荒木 そういう感じはしました。タイム・マシンか何かに乗って、ワープしたような……

今井 最初来た時にね思ったんだけど、何か明治の村みたいで、心がなごむというかそんな感じだから、はっきり言って第一印象は田舎だなと思った。テレビなんかであんじゃん。何か、そんな感じでさ。建物っていうか、模様なんか明治みたいで。

石井 僕は大正だな。

今井 大正？大正でもないんだよ、俺は。微妙な関係にあんだよね。

佐藤 私は、時代劇のセットみたく、刀さしてチョンマゲのかつらをしてってのが、似合う感じがするのよね。

今井 だから、俺、江戸時代、知らないからさ、明治しか知らないんだよ。

石井 明治知ってんのか、おまえ。生きてるなあ。（笑）

今井 だからね、江戸時代っていうと、何かさあ、時代劇でもやってんじゃん、長屋だっけ、あの変な並んでるウチみたいなの。それとか、あと城とか、あんなのしか知んないから、江戸時代の後期っていうのは、そういうのがあったのかも知んないけど、明治っていうと大体さ、外国からこういうのが来るからさ、こういう感じだなぁと思って、江戸じゃないって思う。

石井 これ作ったのも外人だしね。

今井 うん、だから何て言うのかなぁ、ちょっと外国っぽい感じがするっていうか、明治の初期っていうかね。

石井 作った人が、やっぱな、アレグザンダーだからな。

―― 1年生は作った人の名前も知ってるの。

荒木 知らない。

石井 駄目だよ、「東野を翔ける」を見なきゃ。

荒木 外人っていうのは知ってた。

小田 えっ？外人だったの。（笑）

石川 えー、知らないの？（笑）私も、日本って感じじゃないけど、中学校の時に見学に来て、建物の1つ1つが、すごいキレイだなぁって思いました。でも、建物も変わってて良いなぁとは思ったんだけど、私入ろうと思ったのは、個性的な学校だなって思って。

渡辺 校則が一応ないし、私服だし。

荒木 逆にさ、厭だとかもあんじゃないの。こういう建物が嫌いだって、みっともないとか。

小田 派手過ぎる。

荒木 いるよ、たぶん。

石井 要するに、だから、周りにないから目立つってことだろ。

今井 普通のコンクリートの校舎じゃなくてさ。

小田 来るまで高校だとは思うヤツはいないからね。

石井 「何ここ公園じゃん。」なんてね。（笑）

小沢 だから幼稚園なんかタマにね……

石井 でも、いいムードでしょ。貸し出しゃいいのにね、今年の夏はラブホテルとかにね。個室喫茶もあるし、食堂。（笑）

●離れ離れの建物と、色々なコミュニケーション。

石井 建物が離れ離れになってて、いいんじゃん、一回外に出て移るっていうのはね、フェー！と息つけて、何となく。それにいろんな人と会えるしね。

荒木 その、廊下がないことって特徴だと思う。

小田 個室みたい。（笑）

渡辺 他のクラスの人の顔が覚えにくい。

石井 でも割りとウチの学校って、何か変な意味で、団結力みたいのがあるから。特に2年はね。だから、すぐに名前は覚えちゃうけどね。ほとんど名前を覚えているつもりだけど、男は。女の子はわかんないけどね。去年入って1学期の今頃にはもう、ほとんど覚えてたけどね。

小田 さすが！

荒木 でも僕なんか、自分のクラスと、あと部活の人の名前を覚えてね、あと出身校が同じ人とかぐらいを覚えているだけで……

石井 1年は人数多いもんね。クラスで4分の3が男だけで、かなり争いでしょ？女の子……（笑）

小田 争いです。

石川 そんなことない。（笑）

―― アベックとか結構いるの？

石井 全開！（笑）肩抱き合っちゃって、教室でキスするのはいるし。ベランダとか、食堂とか。

小田 この前、見ちゃったもんなぁ、食堂で、いきなり2回もキスしてんの。（笑）

荒木 食堂のトイレの前、電話器があって……

小田 びっくりしちゃったよ！やるなよ、あれ、男の人が電話の所にいてね、そいでね、女の人がトイレから出て来て、「待ったぁ？」とか言って、〝ブチュッ！〟とかやってんの。ビックリしたよ！（笑）

●森、池、スケート、アヒルの羽は暖かい。

小池 パンフレットに「森と池と共に生きる」って書いてあるのに、森が少ないよ。もっと身近でカブト虫なんかいればいいのに。

荒木 俺は、この学校の良いとこって、他校と比べて池が大きいってことはあるんじゃないかな、体育館が池に浮かんでるって感じで。

小田 普通、池ないよ。（笑）

荒木 いや、金魚やなんかのいるサビくれたヤツ、あるじゃん。（笑）

石井 建物も良いけど、池もやっぱ良いよなぁ。おかげで、グランドは狭いけどね。

荒木 茶畑をグランドにできないの。

石川 それは、もったいないよ。

石井 昨年実際にね、アンケートとってね、「グランドが狭い」とか、「池をつぶせ」とかね、いろいろあったけど、なかなか捨てがたいでしょ。もし、あの池がなかったら……

小田 おもしろくないね。

佐藤 うん。

石井 あれで、池がキレイだったらね。絶好調なんだけどね。

石川 じゃ、みんなで池を掃除しよう。

石井 そう、それはS.P.C.（School Pond Comittee）の仕事です。ボート浮かばせるだけじゃなくて。そういやぁ、ボートから落ちたらパニックだよな。

佐藤 また落ちたんでしょ。

今井 結構、落ちてるよな、みんな。（笑）深い所でも1mくらいじゃないかな。

石川 入ったことあるんですか。

今井 泳いだよ、夜中。水の方が暖かかったよ。

佐藤 きたなーい。

今井 俺、落とされたんだよ。みんな入ってんのに「俺いいよ。」ってたら、みんなに担がれて、バッシャーンて。頭まで漬っちゃったよ。髪の毛、洗ったら緑色だもん。（笑）そうそう大講堂の裏ってね、スケートできんだよ、冬に。知ってる？

出席者

1 石井悦雄：2年1組 バスケット部 自治会会計・今、バイク、ギター(バンド)、BOØWYなどに興味がある。
2 今井 真：2年11組 サッカー部 自治会書記・今、バイク、エレキギター、パソコンなどに興味がある。
3 小沢 厚：2年7組 サッカー部 自治会次期自治会長に立候補。
4 小池直美：2年8組 ブラスバンド部 自治会書記・今、スキー、サックス、杉山清貴、お料理などに興味がある。
5 佐藤美智子：2年9組 混成合唱部 自治会・今、犬に興味がある。
6 荒木智広：1年12組 体操部・今、聖飢魔IIなどに興味がある。 7 石川ゆき：1年12組 陸上部 環境創造委員会
8 小田光直：1年12組 体操部・今、ギターなどに興味がある。 9 渡辺恵美：1年12組 陸上部

荒木 どうやってスケートやんですか。

今井 氷が張るんだよ。すげぇ、厚いよ。

小田 やろーぜぇ。(笑)

石井 今年の冬は、上から水まくようにすれば良いんだよね。

今井 そのまんまだったら、デコボコしてたもんね。

石川 氷が張った時、アヒルはどうしたんですか。

石井 橋の横にいたっけ。水の出る所があって、あそこはいつも溶けちゃうから。

荒木 寒がらないの、アヒルって。

石井 アヒルの羽は暖かいんじゃん。

●木造、瓦、映画……先生の顔。

石川 校舎が木造って、特徴だと思う。

小沢 木造で忍者屋敷みたい。

小池 木でスッキリしてて、素朴な感じで落ち着くし…

小沢 そういうのって、でも、やっぱし、普通のヤツが恋しくなるような感じもするしね。

石井 あの壁が欲しいとかね。(笑)夏は涼しいんだよね、抱きつくと冷たくて。

小田 あと、瓦が安っぽい。(笑)

石井 そこは、やっぱ、「東野を翔ける」を見ればわかるでしょ、苦労が。あの映画を見て頂ければ、一目瞭然だよ。やっぱ、1年生、今度見せるしかないよ。

渡辺 見たあい。

小田 見てみたい。

佐藤 みんな爆笑しちゃったよね。突然に、先生の、あの先生の顔が……

石井 アップですよ。真剣な顔してたよ。小林先生がいて、林先生がいて、教頭先生がいて…

●大講堂、多目的ホール、体育感。

石井 大講堂はね、工事中のおかげでね、バンドで使えなくて悲しんでんの。しかもね、色がピンクだよ、中、サイテー。

石川 そう、何か不気味な赤い色も塗ってたって。

小沢 去年の方が良かったよ。

石井 アレグザンダーの趣味がわからない。自分の好きなようにやってるでしょう、あれは。

小池 前の方が良かったよね。

石井 あれは文句言って、やめさせるしかないでしょ。

佐藤 私もそう思います。

石井 それに、多目的ホールには、あまりみんな行かないね。

今井 行くヤツもいるけどね。

石井 あそこは何のために作ったのか、わからないね。

今井 そうそうそう。

石川 でも、多目的ホールとか、体育館って、木の組み方がすごいキレイ。

荒木 普通、こんなんじゃないの?

石川 だから、普通の家は、ただ真っすぐになってるけど、多目的ホールとか、体育館とかは、あの、すごい、なかなか、キレイに組んであるから…うん。

石井 体育館はね、やたらとバッテンとかがあってさ、柱とかさ、芸術品っていうか、凝ってる感じでいいじゃん。普通、なってるとしても変な鉄の棒でさ、ビシッと細いので、シューとかなってんじゃん。そうじゃないから、「おっ、すげえじゃん。」なんて。昇れるしね。

荒木 僕も上りました。

石井 で、そこから、みんなで飛び降りるんだよな、やったことない? マット2枚重ねて、そこから飛ぶと、ハッとか言って、顔打って痛いんだよな。(笑)

●一番好きな場所——バルコニー、池、自治会室、教室、食堂、トイレ?

石井 教室のベランダにね、1人でヒュッと寄り掛かって、テープをかけてるのが、一番良いね、俺はね。落ち着くよ、気分が。(笑)皆が持ってくっから、レベッカとか、聖飢魔IIとか、いろいろね。

小沢 やっぱ、池だよね。ボートに乗ってる時とか、泳いでる時とか。

今井 わかんないな、あんましな。最近、自治会室かな。自分の部屋感覚で、くつろげるっていうかね。話し合いとかもさ、お菓子食べながらとかさ、ジュース飲みながらとかって、あったから。池も良いけどね。

小池 教室とか、体育館の階段みたいになってる所とかが好き。教室で、どこが好きかっていうと自分の机の所で、好きな時に寝れるし(笑)、マンガ持って来ても、お菓子持って来ても怒られないし。(笑)

佐藤 私はね、朝、食堂にいつも行くんだけど、ジュース飲んで、食堂のね、個室があるでしょう、2〜3人でね、その中から、バスとか、ほら、みんなゾロゾロ来るでしょう、あれを見るのが好きなの。「これから朝だ。」とか(笑)、「始まるんだ。」とか、ちょっと嫌だとか思ったりねえ。

渡辺 んと、教室の後のベランダの所。いつも、床に座って10人くらいで、お弁当食べてる場所だから。たまにパアーとかいって男子が通ってく時あるけど、女子が占領しちゃってるの。

小池 教室の後ろの所から飛び降りる人もいるしね。

石川 私は部活のない時とかに、教室とか、あっちの方の草むらで、ボォッとしてる時が好きです。部活を眺めたりして。あと、みんなでお喋りしてる時とかが好きです。

荒木 やっぱり僕も、教室の後ろのあそこで、窓の下の所に座って、外を眺めてんのも好きだし、あと池でボートに乗ってて、真ん中辺にいる時。

小田 俺は特にない。

荒木 休み時間になると、おまえ食堂でジュース飲んでるよ。

小田 でも、良くわかんない。トイレかな?(笑)

石井 最後にさぁ、言いたいんだけど、建物ばっか見られるのって厭なんだよね。まず、最悪だな。俺らはそっちのけかなって。でも、それはそれでね、ウチの学校のね、良い所として載るんだから、それは構わないけどね。俺らは、「主役は俺達だ。俺達がこの学校創るんだ。」みたいな感じだからさ、プライド高いよ皆、中学の時に修羅場くぐって来たヤツが多いからね、そういう風に思ったんだ。もっと、俺達の授業とか、人間関係とかも見て欲しいな。

—— どうも有難う。

(1986年6月17日 文責 編集部)

本稿をまとめるにあたって、
東京理科大大学院生・西岡浩是氏の多大の協力を得た。

Photo by Hiroya Kaji

At the End

座談会　出席者/多木浩二　難波和彦、司会/山崎泰孝

問題群としてのアレグザンダー

●アレグザンダーを考える視点

山崎　盈進学園については、具体的な形に対する印象を書いて頂いたということもあって、やはり「日本的」デザインとかそういうものが、話題になっていますが、そのあたりから、どうでしょうか。

多木　皆さんの文章を読んでもだいぶん日本的とかそういう感想が出てきますが、結論から申しますと私は日本的な建築じゃないと思いますね。ナマコ壁とか、教室の壁とか、サッシ割りとかそういうところに古いものを感じさせはしますが、教室まわりの列柱のところなんかイタリアのボローニャにあるようなアーケードと同じ空間ですしね。ただ、表面の意匠に、日本的という連想を起こさせるようなものを付けているということでしょう。だから、日本的な伝統との比較で捉えるとか、それにしてはおかしいとか、そういう問題の捉え方をしない方がいいんじゃないか、と私は思います。

特にポストモダンと言われるようになってから、歴史の断片を寄せ集めるといったジェンクス流の一番悪いポストモダンの影響で、日本における建築の概念が、非常に曖昧になってしまっているところがありますが、そういう状況に対して、やはり、建築を考えること、つくること、建築を使うこと、建築家の役割、について、アレグザンダーの答が正しいかどうかはともかく、もう1回考えることを促すような、非常に刺激的な建築だと思います。私は、プラスの評価をしています。そこから考えていくと、別のアレグザンダー論が出てくると思うんです。彼は最初の出発点がチョムスキーであって、そのことは「形の合成に関するノート」などにはっきり出て来ますが、いったんセミラチスのような自然発生の錯綜体を扱いますが、つくりだす立場からみると、内側がどう錯綜していようと、全体としてのかたちを捉えるために、パタンランゲージという全体にまとまりを与える。この段階ではひとつひとつのパタンは、ばらばらですが、そこから更に統合の形式を見出すという、たえず抽象化した数学的思考が動いていくわけですね。この統合を求めようというところに、この建築があって、その統合の形式はセンタリングプロセスという形で現れてきているんだろうと思いますね。

そういうことを考えていくとアレグザンダーは、実践的な理性に徹底して貫かれています。セミラチスだってこの系として出てくるわけです。これは完全に操作的で抽象的なものだと思いますが、そこにはイメージというものがすくいあげられる可能性がないんですね。彼が、しょっている文化—アメリカの文化というよりユダヤの文化だと思うんですが—が実はイコノクラスムの論理で、イメージはそこからはみでている。だから建築に与えている感覚的な質、イメージというのは、建物をたてる土地で吸収したようにして出てきます。その場その場で解決していくような形でしか解決出来ない。だからインドに行けば実は全く同じシステムでありながら、表層においては違ったイメージでつくるだろうというような連想な起こさせるようなやりかたをしている。そこにシステムと表層の乖離という矛盾があって、その矛盾はアレグザンダー自身も解決できなくて、そのままになっているんではないですかね。だから他方では統合を求める理性自身が、むしろ彼がパタンランゲージやなんかで考えてきた具体性を裏切って非合理性を生むという方向を、はらんでいるのではないか、というようなところまで考えさせるというような建築なんですね。この理性の純粋な運動をみていると、西欧文化、いやユダヤの文化というものを感じさせるんです。それは神秘主義と紙一重でしょう。

具体的にこの建築について述べるなら、確かに入った時から普通の学校と非常に違う印象で、やっぱり、彼が言うポジティブ・アウトドア・スペースというような意味は、はっきり把握できます。色々なところに、分割できないようなまとまりのある空間があって、そういう配置のうまさというものを感じました。配置—それが統合のシステムなんですね。だから1つ1つの建物がいいか悪いかというようなことは、私にはあまり問題にしてもしようがないと感じたんです。もし、強いて関心をもったスペースを挙げるならば多目的ホールとか、あるいは武道場というように、幾つか拾い上げられますがね。

●変数Xとしての多目的ホール

難波　多目的ホールが一番いい空間だという点については、評価は誰もが一致するんですね。そこで盈進学園のパタンランゲージをつくっていくプロセスを昨日もう一度見直してみたんですが、多目的ホールは最後の最後まで出てこなかった建物なんです。第3次のパタンランゲージの最終段階になって、どうしても、ここに何か必要だというので考案された建物だというところが、ちょっと不思議な感じがしたんですよ。つまり、多目的ホールには具体的なプログラムが対応していないわけです。純粋に空間の質を高めるものとして、建築家の側から提案された建物なんですね。

ですから、多目的ホールのでき方に、多分、統合の方法としてのセンタリングプロセスの重要な問題が隠されていると思います。大学領域との関係を考えても、丁度つなぎの位置にあるわけですし、いろんな意味でシンボリックな建物ですね。

多木　これが一番あとに出てきたというのは、何か決定できないが必要な空白が中心になって全体のシステムが動いていくということですね。その中心を、やっとここで発見したということで、だから、非常に象徴的な空間なんでしょうね。私はこの計画の、まだ分からないものをひとつの中心にして、しかし、全部が関連しながら動いていく、その分からないところは後で見付けていく、そういうシステムのやり方というのは非常にアレグザンダーらしくて面白いと思います。

山崎　アレグザンダーもこの建物をかなり成功したと思っているようですね。

難波　そうみたいですね。メキシコのメキシカリの集合住宅は、建設中ではありますが彼は成功していると考えているようです。しかし、住宅以外の建物で彼の方法がうまくいくのかどうかは、彼にもはっきりとは分からなかったんでしょうね。

住宅は、基本的には家族が単位ですから、空間もそれに対応させて組み合わせるというのは、パタンランゲージの考え方にも論理構造的に合っているわけで、方法としてはそんなに難しくないんですね。ところが、こういう類の機能—住宅とは全く違った機能—をもったものに対してもパタンランゲージが適用出来たということで非常に成功した、と考えているようです。

それと、先程、多木さんがおっしゃった、理性とか合理主義の捉え方で、合理主義が神秘主義と紙一重にあるという話に関連すると思うんですけれども、普通、合理主義っていうと隅から隅まで論理的、合理的にやっていくという考え方なんだけれども、彼の場合は、多目的ホールのようにわけの分からない部分—虚の部分といいますか—合理では説明しきれない部分を最後に冷えびえと取り出すための合理なのではないかという感じがしますね。普通、合理という場合の、最



Photo by Hiroya Kaji

初から明示的に述べられたものに基づいて論理を組み立てていくというようなやり方と違って、彼の場合は、はっきり提示できない部分を浮かび上がらせるための合理であるというところが神秘主義的な印象を与えるんではないかと思います。でも、考えてみると、合理主義の本来の姿は、実はそうした図と地が逆転するところまで合理を突きつめるところにあるんじゃないでしょうか。

多木 多目的ホールというようなところは、多分、最初から彼の中でXという形で残っていたんでしょうね。そこへあらゆるものが吸収されていくようなXという変数を1つ含みながら全体をすすめていくという考えなんでしょう。

この、本来決まらない部分を残しながら全体を捉えるという方法は、アレグザンダーには、かなり初期からあったんだと思いますね。例えば最初のツリーとセミラチスの論文もそうですし、パタンランゲージの思想になってもその内部が分からないまま全体を考えるという形をとっていますしね。ですから、セミラチスとリゾームを結びつける考え方は、一見すると正しいように見えますが、そうではないと思います。セミラチスは、むしろ強力に全体を理性化する意志から逆説的に生じてきているのですからね。

山崎 その適用させるといいますか、この建物をつくるということが彼の論理をどういうふうに発展させたんだろうかというのが、気になるんですが。

難波 システムをどんどん広げていってますね。

まだ発表されていませんが〝Rebirth of the city〟(都市の再生)という本がタイプ原稿で出来ているんですが、その中で現実に存在する街に対して、空間的な提案だけではなくて、その街全体の行政組織、議会制度、法律組織、予算編制、そういったものまで提案しているんですよ。それは、あまりに急進的、ファシズム的であるというので、受け入れられなかったそうですけど。ですから、最後は世界システムの話にまで行ってしまうわけです。事実、この学校がつくられたプロセスの報告書としていずれ出版される予定の〝Battle〟の草稿でも、現状の世界システムに対して、自分達の考える世界システムを対置させていますね。

多木 私は、アレグザンダーは非常に実践的な人だとは思いますが、同時にリアリストではない面がありま す。リアリストのように部分部分で解決して、後は構わないということをしない人でしょう。計画そのものは彼の理論の中では、部分ごとにやりながら全体が出来ていくんですけれども、部分だけを手直しするというようなリアリストの方法はこの人にはないんですね。環境を知的に再編制することを考えている点では、理想主義ということも出来るでしょうし、それがもし政治ということになるなら、今おっしゃったようにファシズムになるんですね。ファシズムというのは、人がよく思うような非理性の世界ではなくて合理的なシステムですからね。アレグザンダーには確かにそれをどこかで感じさせる部分がありますね。

ただ、アレグザンダー＝ファシズムとあまり短絡させるのではなくて、プラトンが理想の都市国家を考えたのと同じような意味でのイデアリストですから、必ずしも直結してファシズムという訳にはいきません。彼の場合、基本的にあるのはデモクラシーですからね。

この学校を見ていてもそうですが、いっぱい矛盾が見えるから、理性を一貫させて、徹底するところだけ捉えて、そこだけ偏微分していくとファシズムになるけれども、もう少し柔軟なデモクラシーの部分とか、理想主義の面とか、ユダヤ的神秘主義とか、色々とまじりあっているんですね。

●日本の建築家にアレグザンダーの提起する問題

山崎 日本の建築家に対して、この建築はどうなんでしょうか。

多木 日本の建築家の場合は、「象」の建築を理解する時にも、あの龍宮城のような意匠でひっかかっていると、「象」の本当の姿は見えないんですね。「象」というのはプランナーの集団なんですね。そのへんで評価すると「象」は、違ったふうに見えますね。

同じように、この学校では、表層の部分でひっかかるとこれは一体なんだということになったり、日本にしてはおかしいとか、外国人だから適当なカキワリをつくりやがったとか、そういう反応もあるでしょうし、それも既にお話したように一理はあるわけですが、けれども、そこでひっかからない方がいいですね。もう1つ奥にあるプランニングの思想を考えるべきです。プランニングも、これだけ大きなものになってくると、都市に近いわけですから、都市プランニングできないのと同じように、どこかプランニング出来ない部分をもっている多様、多元的なものを相手にするわけですよね。そのプランニング出来ないものも含めて合理的システムで貫こうとする彼の態度というものを、いいか悪いかという、そのあたりで論議すべきで、見え掛りで論議するだけでは、いけないんじゃないでしょうか。私は、さっきも言いましたようにアレグザンダーを完全に近代主義と考えています。だから、科学と芸術というものの統合を考えているし、それが必ずしもうまくはいっていないことは自分で知っていると思います。

だから、私はまず、彼のラジカリズムを通じて、もう一度近代主義を考え直し、同時に人間と環境について考えてみることは無駄ではないと思っています。さっき話題になりました多目的ホールのようにXを残しながら多様な全体を構造化し最後にXに到達するという、そのシステムの進め方を批評すべきでしょうし、先程も申しましたように私はプラスの評価をしていいと考えています。何故かというと、日本の建築家の中には、本当にここまで考えるという徹底したラジカリストは今のところいないと思うからです。同時に、彼には根本的に芸術の諸問題はわかっていないことも明らかにする必要がありますが、それでも、彼のラジカリズムは、こちらの思考を挑発するものがあります。

彼のイデアリストの面、神秘主義者の面、ファシストの面、特に教育に対するデモクラティックな面、という接続させにくいし充分には分からない要素を重層させながら、なおかつ1本筋を通すというユダヤ的文化と言いますか、それを考えることだけでも充分、意味があります。

山崎 建築家の人も—私も含めて—分からないで表づらだけを見て評価しているんで、この建築があまり刺激にならないんですね。

難波さんは、そのあたりどうでしょうか。

難波 少なくとも、40歳代半ば以下の建築家達は、プラス、マイナスは別として60年代末のムーブメントを経験した人達ですし、そういうところで琴線に触れる部分があると思うんです。ただ、かつての運動の結果に対しても非常にニヒリスティックになっている面が強いから、むしろ目をそらす人達の方が多いかもしれません。

山崎 案外、もっと若い世代の人の方が、素直に面白いじゃないかというふうに感じる場合もあるかもしれ

ませんね。

多木 その場合は、完全にポップ的という形で受け取ってしまうということが、あるんじゃないでしょうか。そして、どれもこれも意匠が違いますから、システムがあると思わずに、ポップ的であると同時に多様なものの拡散的集合であるというように受け取ると思うんですよ。

難波 日本の建築界でも、アーキテクトビルダーの問題とか、建築家の職能に係わる面で、アレグザンダーに非常に近いところにいる人達が、むしろ反発してしまっていますね。例えば「象」の場合は、職人のもっている現状のリアルな技術とか考え方をまず認めて、そこから可能性を何とか引っぱり出すというような、どちらかと言えば適応的なやり方ですよね。ところがアレグザンダーの場合は，特定の原理や価値を先行させて、それに職人を合わせていくという考え方ですから、それが駄目だ、というふうに「象」の樋口裕康さんはおっしゃる訳ですね。

石山修武さんなんか、本来は最もアレグザンダーに近い問題意識を持っておられると思うんですが、アレグザンダーがフラーの考え方を批判しているということも絡んで、この学校の表層のデザインや技術的な稚拙さに反発を感じて、どうしてもストレートに受けとめられない、といった反応ですね。残念ですけど。もしかすると、こうした方法上の差は意外と深いところに根があるのかもしれませんが。

多木 アレグザンダーの中には、近代を形成した思想というものが生きていますよね。

難波 全くその通りだと思います。デザイン面では近代を否定しながらも、考え方というか思考の面では、近代的な方法を徹底して突きつめていくという方向ですね。ぼく個人としても、その方向に最も大きな可能性があると考えています。

多木 というのはユダヤ人的合理性というのが近代主義の基本ですから、彼は完全な近代主義者だと思うんですよ。下手にこれをポストモダンだというふうに受け取ってしまうと違うんですね。

山崎 最後に多木先生に、今後の日本の建築家に対してアレグザンダーの思想と関係して何か、おっしゃって頂ければ……

多木 ひとつは作家というか建築家の主体のありようというのが問題になるわけですが、その主体というのはある意味で普遍化され、誰でも使える方法を目指したこの建築の中でも形成されているわけですね。主体のありようというのは、何も内面の表現とか、芸術的なものに溢れているとか、精神的な価値の実現ということでなくても、ありうると思うんです。

現代日本の40歳代半ばの良質な建築家は、その前の世代とは主体の置き方が完全に変わっています。結局、建築の概念がほんとうに変わりつつあるんですね。主体の置き方が変わっているという見方でアレグザンダーを見たら、もう少し眺める視野も出来ます。そうするとこのアレグザンダーの学校も、もう一度、注目されるでしょうし、近代主義というものを振り返る時の1つの重要な材料となる得るだろうと思います。フラーとアレグザンダーとどちらが、我々にとって、なお考える余地があるか、それは断言は出来ません。

また、生きていくスタイルというものが建築だという思想を取り出しても、充分考えるに値します。例えば、私が今思い付く範囲内の建築家では、伊東豊雄さんとか、長谷川逸子さんなどのように、アレグザンダーから非常に遠い人の中に、この主体の問題も、人々が生きていくスタイルと建築の関係も、なんらかの形で問題になっているのを感じるんです。

アレグザンダーの提起している問題は、必ずしもそのまま使う、同じようなことを考える必要はないにしても、方法の根底にあるものが遠くで響き合って、日本の建築家達が、自分の建築のあり方を発展させていく時に、何か考える材料になるかもしれないと思うんです。

山崎 どうも有難うございました。

(1986年7月19日)



Photo by Hiroya Kaji



多目的ホールで特別に行なわれた、日本環境構造センターメンバーの、結婚式記念写真。 *Photo by Hiroshi Kobayashi*

多木浩二(たき こうじ)
1928年　神戸市生まれ　東京造形大学教授　芸術学・記号論　芸術から社会、歴史、政治などを読みといていく方法を確立し、そこから記号論(修辞学)の理論的探究を続けている。著作に「眼の隠喩」「生きられた家」「〈もの〉の詩学」「モダニズムの神話」その他がある。

難波和彦(なんば かずひこ)
1947年　大阪府生まれ　建築家　界工作舎主宰　建築づくりのシステムや仕掛けを考えていく中で、アレグザンダーに出会い、現在、パターンランゲージ研究会(PL塾)を行なっている。
作品に、竹の友幼稚園、OFFICE MACHINE等がある。

山崎泰孝(やまざき やすたか)
1935年兵庫県生れ 建築家 福井工業大学教授。アズ・インスティテュート主宰。作品に、芦屋市ルナホール、善光寺別院願王寺、グランディア芳泉その他がある。

盈進学園東野高等学校

設計——C.E.S(Center for Environmental Structure 環境構造センター)
担当
クリストファー・アレグザンダー
ハンスヨアヒム・ナイス
イングリッド・キング
ゲーリー・ブラック
日本環境構造センター
監理——日本環境構造センター(C.E.S.Japan)
担当
クリストファー・アレグザンダー
ハンスヨアヒム・ナイス(所長)
住吉寅七(棟梁) 西田実(土木) 中埜博
石久保毅 塩原民雄 小西葉子
佐々木敏彦 長塚正美 筒井実代子
構造(大規模木造)協力
早稲田大学理工学部 松井源吾
MUSA研究所 盤田正晴
施工——フジタ工業東京支店
設計期間——1982.5～1986.7
施工期間——直営工事／1983.11～1984.4
主工事／1984.8～1985.4
残工事／1985.4～1986.7
面積——敷地面積62,123.14㎡
建築面積 5,606.43㎡
延床面積 9,061.14㎡
所在——埼玉県入間市二本木
掲載誌——SD8503
建築文化'85年6月号
新建築'85年6月号
日経アーキテクチュア'85年5月20日号
住宅建築'86年1月号
DIME創刊号 その他

クリストファー・アレグザンダー(Christopher Alexander)
1936年 ウィーン生れ 建築家 環境構造センター主宰、カリフォルニア大学バークレー校教授 「都市はツリーではない」「形の合成に関するノート」「オレゴン大学の実験」「パタンランゲージ」その他の多数の著作で、常に新たな思想を示し続けるだけでなくカリフォルニア、ペルー、メキシコなどでその実践を行う。

ハンスヨアヒム・ナイス(Hansjoachim Neis)
1947年 建築家 西ドイツ・ヘッセン生れ 日本環境構造センター所長 フランクフルト学派的な批判の弁証法を軸に、ドイツ・アフリカなどで実施設計に携わる。
渡米後、アレグザンダーに師事し、カリフォルニア大学にて助手を努める傍ら、環境構造センターの設計・施工を主導する。

SPACE MODULATOR NO.68 1986
発行日——昭和61年10月1日
発行所——日本板硝子株式会社東京本社
SPACE MODULATOR 編集部
電話(03)436-8874
発行責任者——村山長久
企画編集——AZ∑環境計画研究所
山崎泰孝・大工原 潤
表紙撮影——梶 洋哉
制作——小島良平デザイン事務所
小島良平・太田雄一
印刷——大日本印刷株式会社大阪工場

Photo by Tsutomu Sakamoto

Architecture Watching 2.

盈進学園東野高等学校

68

SPACE MODULATOR